

宮城県文化財調査報告書第256集

宮城県文化財調査報告書第256集

源光遺跡 ほか

源光遺跡

令和三年三月

令和3年3月

宮城県教育委員会

宮城県教育委員会

# 源光遺跡 ほか



## 序 文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から早 10 年が経過しました。国の復興基本方針に定める「復興・創生期間」は今年度でひとつの節目を迎え、県内においてもインフラや生活基盤の整備が着実に進められています。令和 3 年度以降の「第 2 期復興・創生期間」においては、残された復興事業を推進するとともに、活力ある地域社会の創造が求められるものと認識しております。

当教育委員会ではこうした復興事業に加え、通常事業に伴う開発行為に対しても埋蔵文化財の保存と事業の両立を図るよう協議・調整を行うとともに、市町村教育委員会と協力しながら発掘調査を実施しています。本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなったもののうち、令和元年度に当教育委員会が国庫補助金を得て行った発掘調査の成果、及び平成 27 年度に南三陸町の県道志津川登米線復旧事業に先立って実施した発掘調査の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

令和 3 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長 伊東 昭代



## 例　　言

1. 本書は、宮城県が平成30年・令和元年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財課が実施した開発事業に係わる発掘調査、及び平成27年に実施した一般県道志津川登米線の災害復旧事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課（平成27年度当時）・文化財課が担当した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に関しては、以下の方々及び機関からご指導・ご協力を賜った（五十音順、敬称略）。

栗原市教育委員会、七ヶ宿町教育委員会、南三陸町教育委員会、田中則和
4. 各遺跡の位置図は、国土地理院発行1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 本書で使用した測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位Nは座標北を表している。
6. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。

SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 SX：竪穴遺構・焼成遺構・性格不明遺構 P：柱穴・ピット
7. 本書における土色の記述にあたっては、『新版標準土色帖 1994年版』（小山・竹原1994）を使用した。
8. 土器実測図のうち、土師器内面にグレー塗り表示してあるものは、内面が黒色処理されていることを示す。
9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

平成27・令和元年度調査の概要 源光遺跡 東島田原遺跡・上足沢遺跡 矢内雅之  
おたまや遺跡 黒田智章
10. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

## 目　　次

### 平成27・令和元年度調査の概要

源光遺跡	1
東島田原遺跡・上足沢遺跡	17
おたまや遺跡	27
報告書抄録	47

## 平成27・令和元年度調査の概要



当教育委員会では、埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を受けて、道路改良・ほ場整備事業等に係わる発掘調査を実施した。これらのうち、本書には令和元年度の源光遺跡（栗原市）及び東島田原遺跡・上足沢遺跡近接地（七ヶ宿町）の調査成果を収録している。あわせて、平成27年度に実施したおたまや遺跡（南三陸町）の調査成果も収録した。以下、各遺跡の概要を述べる。

### 【源光遺跡】

栗原市築館に所在する遺跡で、これまでの調査では古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、

中世以降と推定される竪穴遺構などが確認されている。本書に係わる発掘調査は、都市計画道路源光町田線の改良工事に伴うものである。既存道路の路盤入替えに際して調査を実施したところ、竪穴遺構1基、溝跡3条を検出した。竪穴遺構は平面形が隅丸長方形を呈し、短辺中央に柱穴を伴うものである。同遺跡や周辺遺跡の過去の調査でもこれと類似した竪穴遺構が確認されており（宮城県教育委員会2009・2019）、その分布が今回の調査範囲にも及ぶことが明らかとなった。

### 【東島田原遺跡・上足沢遺跡】

白石川右岸の河岸段丘上に位置する東島田原遺跡・上足沢遺跡は、縄文時代の散布地として登録されている。両遺跡の近接地が農地中間管理機構による農地整備事業の範囲に含まれる見込みとなったことから、遺跡の範囲を把握するために確認調査を実施した。その結果、東島田原遺跡近接地において柱穴・ピットを検出したが、堆積土の状況からこれらは近代以降のものと考えられた。また、縄文土器片や石器も少量出土したが、これらは周辺からの流れ込みとみられる。これらのことから、両遺跡の範囲は調査対象範囲までは広がらないものと判断された。

### 【おたまや遺跡】

おたまや遺跡は、南三陸町志津川に所在する古代の遺跡で、これまでの調査により9世紀の竪穴建物跡3棟が検出されている。平成27年度に県道志津川登米線の復旧工事に係わる確認調査を実施した結果、8世紀代の竪穴建物跡1棟などを検出し、集落域の広がりが明らかになった。

# 源光遺跡

## 調査要項

遺跡名：源光遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 No. 41068） 遺跡記号：AGK

所在地：宮城県栗原市築館伊豆、築館源光、築館内沢

調査原因：都市計画道路源光町田線改良工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

調査期間：令和元年 6月 5日～6月 24日

調査面積：1,039m<sup>2</sup>

調査協力：宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所 栗原市教育委員会

調査員：須田良平 矢内雅之

## 第1章 調査に至る経緯

栗原市築館の市街地東部に計画された一般国道4号築館バイパスは、史跡入の沢遺跡の保存に伴うルート変更箇所を除き、供用が開始されている。現在、バイパスに接続する都市計画道路一迫南線（市道）、及びこれに交差する都市計画道路源光町田線（県道）の整備事業が進められているが、両線の計画されている丘陵上には源光遺跡や下萩沢遺跡など、いくつかの遺跡が所在する（第1図）。このため、道路改良工事等に先立ち栗原市教育委員会や宮城県教育文化財課（以下、当課）は、栗原市都市計画課や宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所等の関係機関と協議し、平成22年度以降、両線に係わる遺跡の確認調査や本発掘調査を実施してきた（第2図）。これまでの発掘調査では、古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、中世以降と推定される竪穴遺構などが確認されている（栗原市教育委員会2012・2015、宮城県教育委員会2019）。

今回の発掘調査は都市計画道路源光町田線の改良工事に伴うものである。既設道路範囲を除いた箇所については平成29・30年度に当課が確認調査と本発掘調査を実施し（宮城県教育委員会2019）、令和元年度に残りの既設道路の路盤改良等に伴う確認調査及び本発掘調査を実施することとした。工事は都市計画道路一迫南線との交差点から南に約150mの範囲に計画され、このうち切土による遺構への影響が懸念された南側約130mの範囲を調査の対象とした（第3図）。

## 第2章 遺跡の概要

### 1. 地理的環境

源光遺跡は、宮城県北部に位置する栗原市の、築館市街地南東部縁にあたる源光地区に所在する（第1図）。築館市街地は奥羽山脈から東方へ延びる陸前丘陵の一部である築館丘陵に立地し、周囲には沖積地（迫川低地）が広がる。築館丘陵は奥羽山脈の東麓に源を発する迫川水系の河川によって複雑に開析され、樹枝状を呈している。遺跡は築館丘陵上に所在し、荒川と一迫川に南北を挟まれた標高35～36mほどの平坦部に立地する。遺跡の西側は宅地化が進んでいるが、東側には田畠、山林などが広がっている。

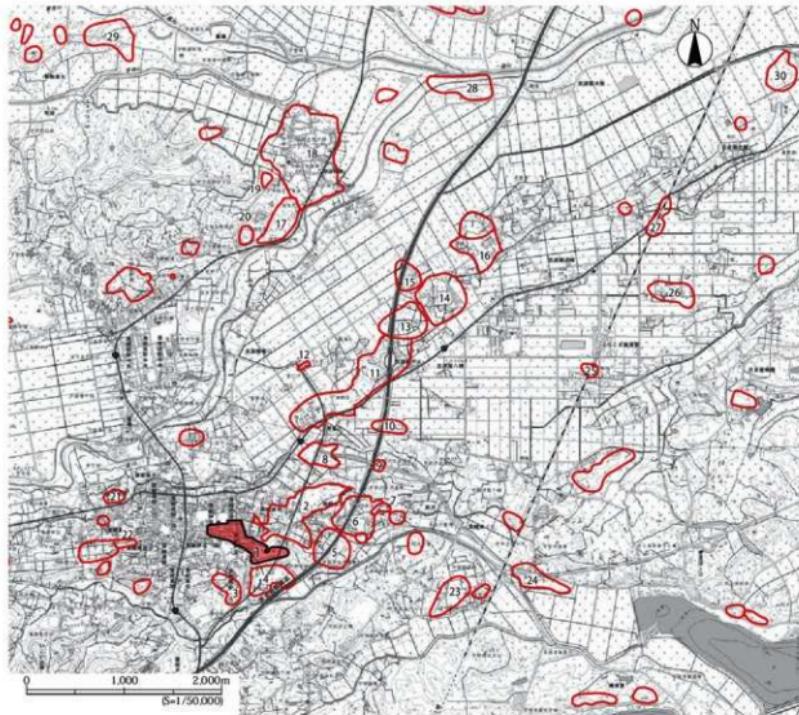
### 2. 歴史的環境

源光遺跡は一般国道4号築館バイパス建設に際して発見された遺跡であり、縄文・古代から近世にかけての遺構・遺物が見つかっている（第1図）。栗原市教育委員会や宮城県教育委員会による近年の発掘調査では、8世紀前半から9世紀前半頃にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが検出されている（栗原市教育委員会2012・2015、宮城県教育委員会2019）。また、中世に属する可能性が高い竪穴遺構が検出されたほか、大木8a式とみられる縄文土器小破片が散在して出土している（宮城県教育委員会前掲）。

本遺跡の周辺には、旧石器時代から近世の遺跡が多数所在する。以下では、本遺跡に関連する縄文

時代、古代、中世を中心とし、周辺遺跡を概観する。

縄文時代の遺跡では、佐内屋敷遺跡(5)、木戸遺跡(6)で縄文時代中期中葉(大木8式)の竪穴建物跡が検出されている(宮城県教育委員会1980b・1983)。嘉倉貝塚(24)では縄文時代前期後葉～中期初頭(大木6～7a式)における環状聚落の形成過程やその形態の一端が明らかとなったほか、晩期後葉～弥生時代前期前葉の墓域も確認されている(築館町教育委員会2002・2003、宮城県教育委員会2003)。鰐沢遺跡(7)では中期末(大木10式)の斜位土器埋設複式炉をもつ竪穴建物跡が



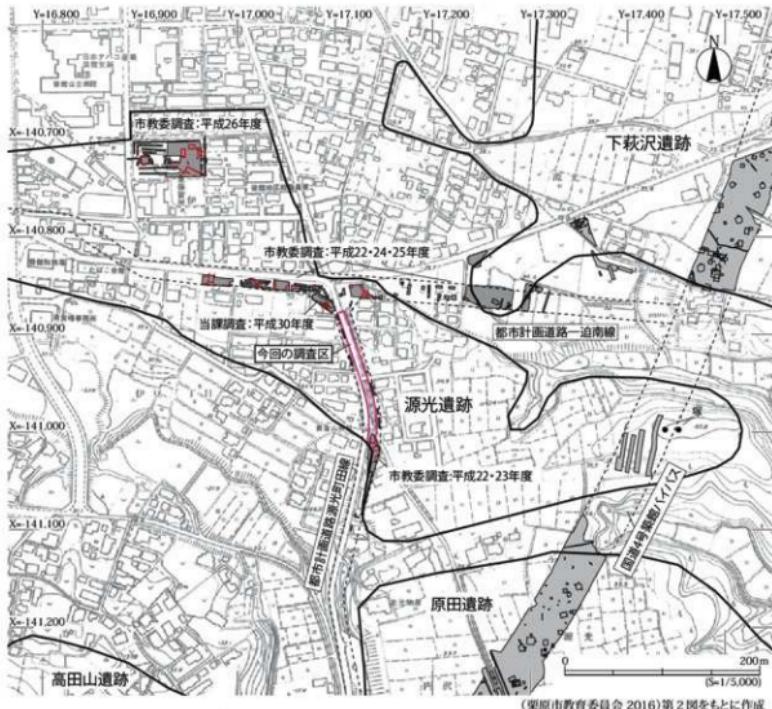
No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	源光遺跡	丘陵	集落	縄文・古代・中世・近世	16	皮道跡	丘陵	散布地・集落	旧石器・古墳・奈良・平安・中世
2	下秋沢遺跡	台地	散布地・集落	縄文・弥生後・古代	17	史跡人の山遺跡	丘陵	集落・塚	縄文・古墳・奈良・平安・中世
3	高山水道跡	丘陵	散布地	縄文・古代	18	安政伊豆道跡	段丘	官衙・集落・古墳・散布地	旧石器・彌生(卑・衛)・古墳・奈良・中・奈良・平安・中世
4	原山遺跡	丘陵	集落	縄文中・古代	19	西山内岸遺跡	段丘	散布地	縄文・古代
5	内岸内岸遺跡	丘陵	集落	縄文中・弥生・奈良・平安	20	人丸古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳群・古代
6	木戸遺跡	丘陵	集落	縄文中・古代	21	竹内遺跡	段丘	散布地	古墳中・古代・中世
7	鰐沢遺跡	丘陵	集落	縄文・弥生・奈良・平安	22	御前山口道跡	丘陵	散布地	古墳前
8	大木馬道跡	丘陵	集落	古代	23	黒崎台道跡	丘陵斜面	散布地	縄文中～衛・古墳・古代
9	後川遺跡	丘陵	集落	奈良・平安	24	須賀貝塚	丘陵	貝塚・集落	縄文中～衛・弥生・古代
10	山ノト遺跡	丘丘	集落	縄文・古代	25	無谷遺跡	段丘	散布地	縄文・古代
11	御前宮遺跡	丘丘	集落	紀元前・縄文・弥生・古墳・近世	26	荒岸遺跡	段丘	散布地	縄文・古代・中世
12	早の沢遺跡	丘陵	散布地	古代	27	大門遺跡	段丘	集落	縄文・奈良・平安・中世
13	下舟道跡	段丘	集落・城郭	縄文前・喫・弥生～近世	28	利根袋遺跡	自然堤防	散布地	縄文・古代
14	竹戸遺跡	段丘	集落	古代・中世	29	長原遺跡	段丘	集落	古墳中・古代
15	鶴ノ丸遺跡	段丘	城郭・集落	縄文・弥生～近世	30	御壁遺跡	段丘	集落	弥生・奈良・平安

第1図 源光遺跡と周辺の遺跡

確認されている（築館町教育委員会 2005）。

古代（奈良・平安時代）の遺跡として、代表的なものに神護景雲元年（767）に造営された城柵官衙遺跡である、史跡伊治城跡（18）がある（築館町教育委員会 1988 他）。集落遺跡には原田遺跡（4）（宮城県教育委員会 1980a・2009）、下萩沢遺跡（2）（栗原市教育委員会 2016・宮城県教育委員会 2009）、木戸遺跡（6）（宮城県教育委員会 1980b）、大天馬遺跡（8）（宮城県教育委員会 2012・2016a）、御駒堂遺跡（11）（宮城県教育委員会 1982・2016b）などがある。

中近世の遺跡としては、原田遺跡（4）、木戸遺跡（6）、御駒堂遺跡（11）、宇南遺跡（13）、鶴ノ丸遺跡（15）などがあげられる。木戸遺跡では壁沿いに柱穴をもつ中世の竪穴遺構が発見されており、これと類似した遺構が原田遺跡でも確認されている（宮城県教育委員会 1980b・2009）。宇南遺跡では中世の井戸跡、土坑が検出されている（宮城県教育委員会 1979）。鶴ノ丸遺跡では掘立柱建物跡、土堀跡、堀跡、竪穴遺構などが検出され、鎌倉時代後期～江戸時代の館跡と考えられている（宮城県教育委員会 1981）。



第2図 源光遺跡と調査地点

## 第3章 調査成果

### 1. 調査の方法と経過

調査対象範囲は、都市計画道路源光町田線の改良に伴い車道が計画された範囲である。工事は都市計画道路一迫南線との交差点から南に約 150 m の範囲に計画されており、現道全体のアスファルトを除去した後、第3図①～⑩地点の順に掘削・埋め戻しを繰り返して進められた。令和元年5月8日の現地打ち合わせでは、既設路盤より下まで切土が及び、遺構に影響が生じる可能性のある同図③⑦⑧⑩地点のみを発掘調査の対象としていたが、6月5日に調査を開始したところ、路盤の碎石層が想定より薄い箇所が多く、遺構に影響が及ぶ範囲の拡大が予想された。これを受け、④⑤⑨⑩地点においても当該が工事に立会い、遺構が検出された場合には本発掘調査を実施することとなった。範囲は交差点を除く東西約 40 m、南北約 130 m で、面積は 1,039m<sup>2</sup> である。

検出した遺構は、竪穴遺構 1 基 (SX1)、溝跡 3 条 (SD2 ~ 4)、柱穴・ビット 12 個である (第4図)。なお、調査区内は既設道路による掘削や現代の水路、埋設管等の攪乱が広範囲に及んでおり、全体として遺構は良好には残存していない状況であった。

遺構の平面図作成にあたっては、工事用基準杭 UT-1・UT-2 をもとに適宜基準点を新設し、遺り方測量を実施した。工事用基準杭の座標 (世界測地系第 X 系) は以下の通りである。

UT-1 : X = -140842.007 Y = 17107.959 UT-2 : X = -140913.259 Y = 17110.086

また、適宜 1/20 の縮尺で断面図を作成した。写真撮影には 2,620 万画素のデジタルカメラを使用した。6月20日には発掘調査を完了し、用地引渡しを行った。翌週 24 日に機材を撤収し、発掘調査の全工程を終了した。

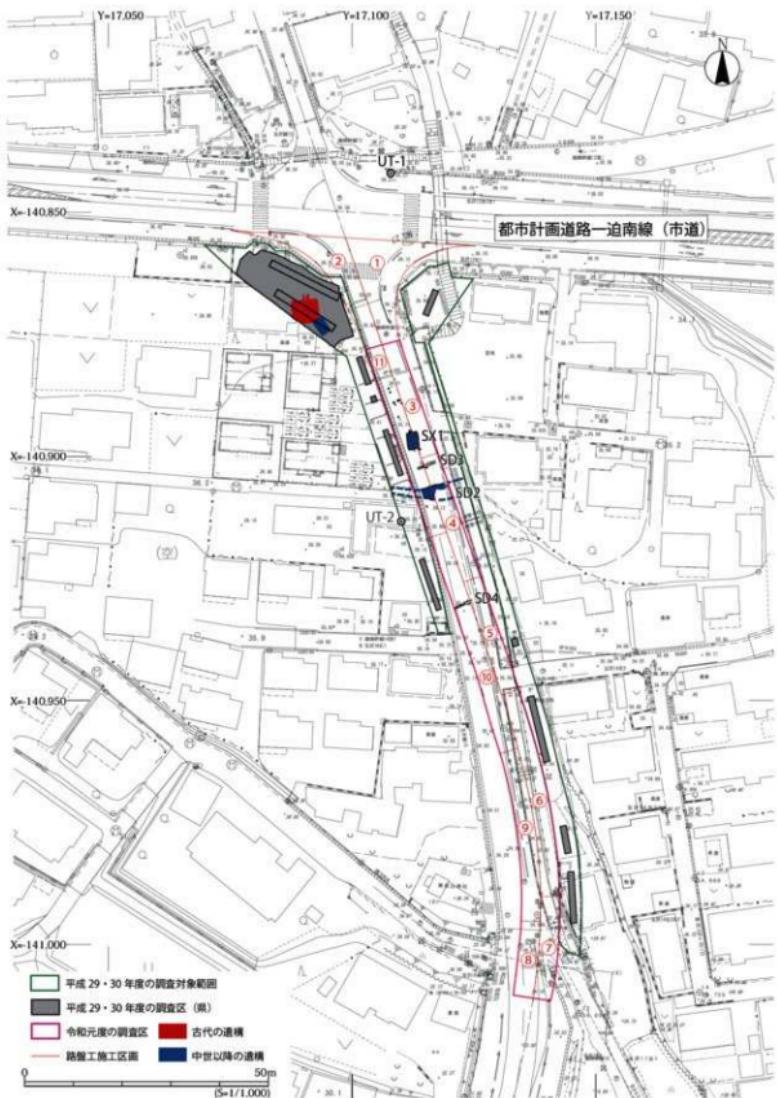
### 2. 基本層序

調査対象地の大部分は既設道路の源光町田線と重複しており、丘陵上の平坦部からその南の沖積面へ向けて降る斜面上に立地している。アスファルト下は厚さ 15 ~ 30cm 程の碎石層により路盤が形成されており、路盤の下では以下の特徴をもつ I ~ V 層が確認された (第1表)。遺構はⅢ層の地山面で検出した。

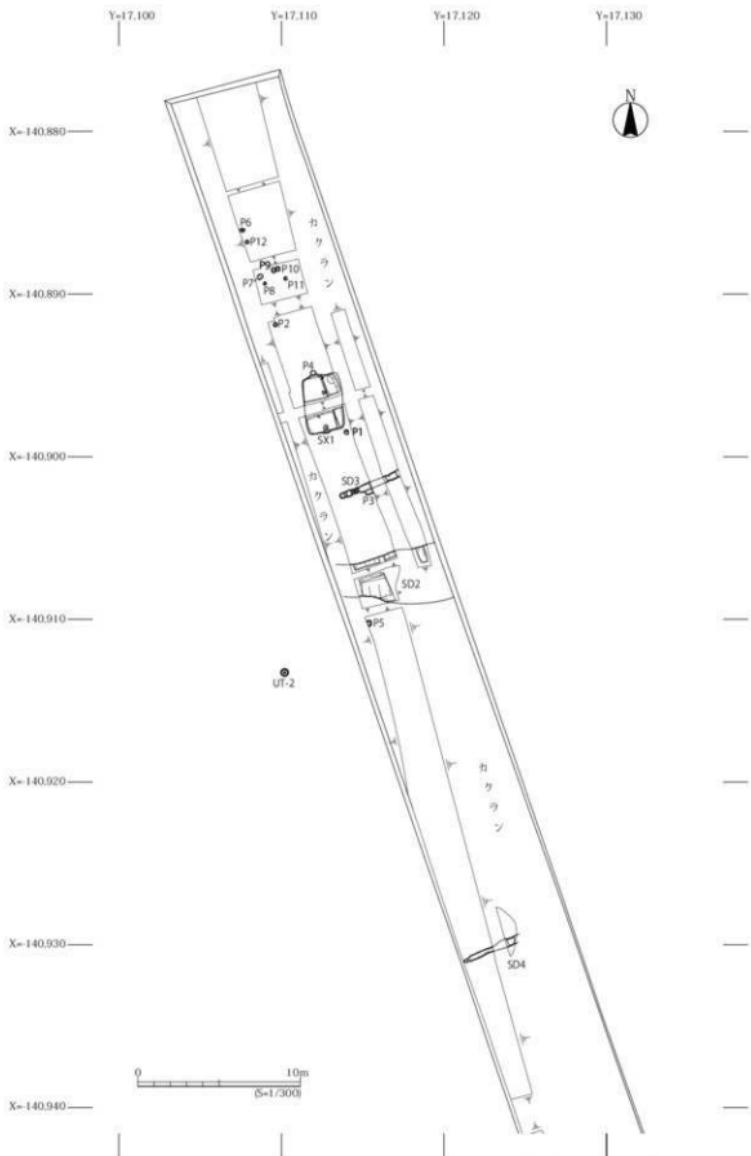
I・II 層は調査区北側の一部だけで確認された。④地点より南側では碎石層直下でⅢ層下部のハードロームが検出され、さらに南側は埋設管等の攪乱が大部分を占めていた。このことから、今回の調査区では南へ進むに従い旧地形が大きく削平されており、遺構も残存しないものと判断された。

第1表 基本層序

層	土 件	土 件	特 殊
I 黒褐色 (10VR2/2)	シルト	碎石層以前の表土 (耕作土か)、地山小ブロック (φ 1 ~ 5mm) を若干含む。	
II 黑褐色 (10VR3/3)	シルト	無特徴。	
III 黄褐色 (10WRS-6)	粘土質シルトまたは粘土	砂 (砾)。しまりあり。下層にいくにしたがい、粘土質シルトから粘土に土性が変化する。	
IV 明黄褐色 (10YR7/6)	粘土	地山。しまりあり。グライ化粘土層。	
V 黄褐色 (2.5Y5/3)	砂	地山。硬質砂層。	



第3図 調査対象範囲と調査区



第4図 遺構配置図

### 3. 検出遺構と遺物

検出した遺構には、竪穴遺構1基、溝跡3条、柱穴・ピット12個があり（第4図）、縄文土器片、礫などが出土地している。以下、主要なものについて説明する。なお、各遺構については路盤入替え工事との関係上、検出・掘削を部分的に繰り返して調査を進めたため、一部に掘り残した箇所がある。

#### 【SX1 竪穴遺構】（第5図）

〔位置・検出面〕 調査区北側のⅢ層で検出した。掘込面はⅡ層である。中央部・北東部が攪乱により壊されている。

〔平面形〕 歪んだ長方形である。

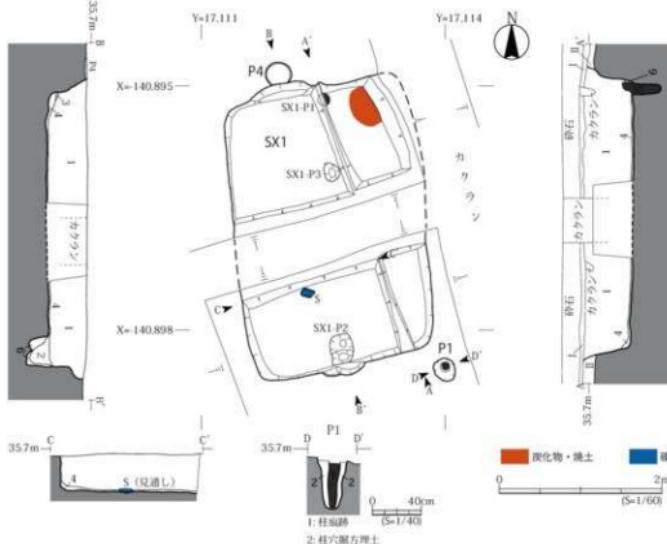
〔重複関係〕 北辺がP4 ピットと重複し、これよりも新しい。

〔規模・断面形〕 東西2.2 m、南北3.4 m、深さが50cmである。断面形は逆台形を呈する。

〔方向〕 西辺で測ると北で西へ約6°偏する。

〔床面〕 ほぼ平坦で、地山を床面としている。遺構北東隅の床面直上には、径約50cm、厚さ約2cmの範囲で炭化物・焼土の堆積が認められる。

〔柱穴〕 短辺中央部の壁際にそれぞれ柱穴が伴う（SX1-P1・P2）。P1は掘方の平面形が径12cmの円形で、床面からの深さが35cmである。P1は掘方の平面形が長辺約30cm、短辺約20cmの闊丸



番号	土色	土性	特徴
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	地山ブロック（φ1～2cm）を多量に含む。炭化物（φ1cm）をやや多く含む。人為堆積。
2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山ブロック（φ0.5～1cm）をやや多く含む。柱抜取。
3	褐色（10YR4/4）	シルト	地山ブロック（φ1～3cm）を多量に含む。壁崩落土。
4	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山土（φ0.1～0.5cm）を少量含む。床面直上に薄く堆積。磯泥時代の堆積。
5	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山ブロック（φ0.5～1cm）を少許含む。SX1-P1柱抜取。
6	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック（φ1～2cm）を非常に多く含む。SX1-P1・P2柱方理土。

第5図 SX1 竪穴遺構、P1柱穴、P4ピット

方形で、深さは 40cm である。それぞれの柱は、P1 は切り取られ、P2 は抜取られたものとみられる。壁やや開き気味に立ち上がる。

〔その他の施設〕中央北寄りの位置で小ピットを検出した (SX1-P3)。平面形は長軸 23cm、短軸 18cm の不整円形で、床面からの深さは 15cm である。堆積土は地山を埋め戻した黄褐色シルト質粘土である。

〔堆積土〕堆積土は 4 層認められる。厚く堆積した 1 層は地山ブロックを多量に含んでおり、人為的な埋土と考えられる。底面（床面）直上には黒褐色シルト層（4 層）が薄く堆積している。

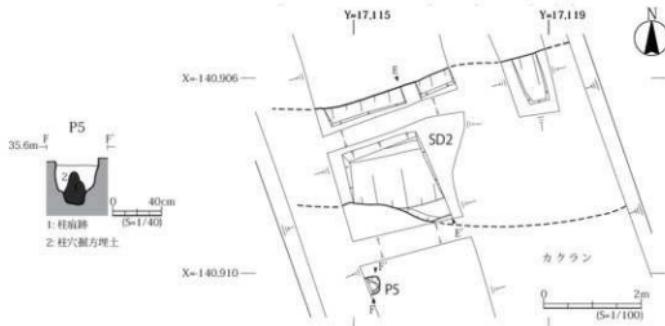
〔遺物〕床面の中央南西寄りの位置から、扁平な礫（第 6 図 1）が 1 点出土している。部分的に被痕が認められるが、明瞭な使用痕は認められない。このほか、堆積土 1 層から縄文土器小破片（同図 2）が出土している。



第 6 図 SX1 積穴遺構出土遺物

#### 〔SD2 溝跡〕(第 7・8 図)

調査区北側のⅢ層で検出した。東西方向の溝跡でトレッチ外にさらに延びる。検出長は約 4.9m である。上幅は 2.0 ~ 2.9m で、調査区東側で幅が広くなるようであるが、擾乱により全容は不明である。



第 7 図 SD2 溝跡、P5 柱穴



第8図 SD2溝跡断面図



第9図 SD2溝跡出土遺物

下幅は 0.3m、深さは 1.1m で、断面形は「V」字形を呈する。堆積土は 6 層で、2・4・5 層が人為堆積、その他は自然堆積である。遺物は堆積土から繩文土器片が出土している（第9図）。



第10図 SD3溝跡

### 【SD3溝跡】(第10図)

調査区北側のⅢ層で検出した東西方向の溝跡である。西側が浅くなり途切れているが、本来はさらに西まで溝が続くと考えられる。検出長は約 4m である。上幅 0.3 ~ 0.4m、下幅 0.2 ~ 0.3m、深さ 8cm で、断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。



第11図 SD4溝跡

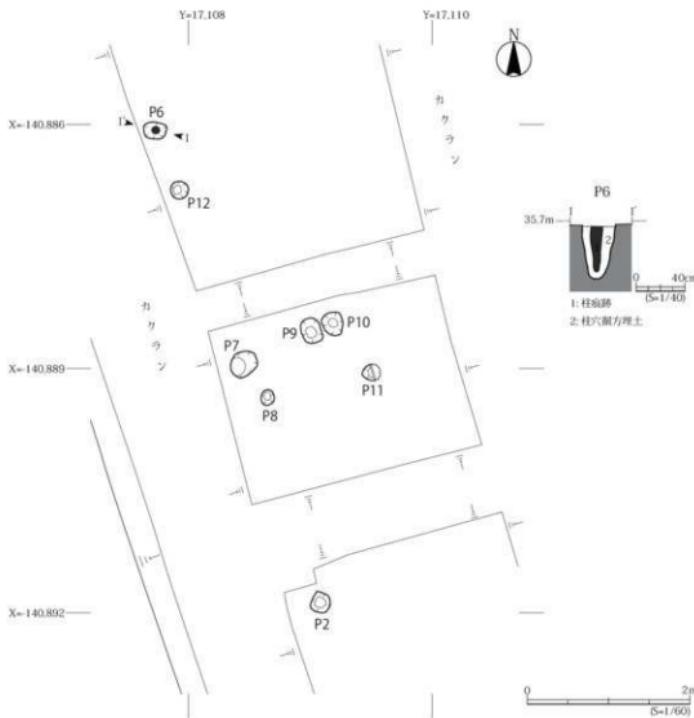
### 【SD4溝跡】(第11図)

調査区ほぼ中央のⅢ層で検出した東西方向の溝跡である。西側が浅くなり途切れているが、本来はさらに西まで溝が続くと考えられる。検出長は約 3.5m である。上幅 0.2 ~ 0.4m、下幅 0.1 ~ 0.3m、深さ 8cm で、断面形は皿状である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。

トである。遺物は出土していない。

### 【柱穴・ピット】

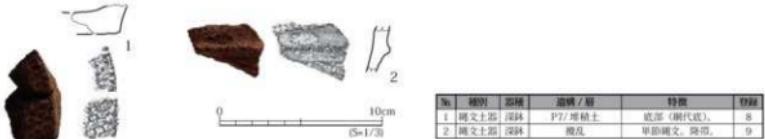
12個の柱穴・ピットを検出した(第2表、第5・7・12図)。これらの堆積土は黒褐色シルトであるが、地山ブロックを含むものと含まないものとに大別され、柱痕跡が認められるP1・5・6柱穴は前者に含まれる。



第12図 P2・7～12ピット、P6柱穴

第2表 柱穴・ピット属性表

番号	種別	柱痕跡・地点	平面形・規模(幅×方)	深さ	堆積土	備考
P1	柱穴	○ ③	長軸29cm、短軸25cmの不規則形。	42cm	地山ブロックを含む黒褐色シルト(方理土)	柱痕跡: 黒褐色シルト
P2	ピット	△ ⑤	一边約17cmの楕円方形。	35cm	地山ブロックを含む黒褐色シルト	
P3	ピット	④	楕円方形?	10cm	地山ブロックを多量に含む黒褐色シルト	SDA→P3。
P4	ピット	○ ⑥	径32cmの円形	3cm	地山ブロックを含む黒褐色シルト	P4→SXに、 特別不明な土器細部が1点出土。
P5	柱穴	○ ⑦	一边約30cmの楕円方形。	38cm	地山ブロックを含む黒褐色シルト(方理土)	柱痕跡: 黒褐色シルト質粘土
P6	柱穴	○ ⑧	長軸27cm、短軸20cmの楕円形。	45cm	地山ブロックを含む黒褐色シルト(方理土)	柱痕跡: 黑褐色シルト
P7	ピット	△ ⑨	長軸35cm、短軸30cmの楕円形。	57cm	黒褐色シルト	陶土質土出土。
P8	ピット	△ ⑩	長軸18cm、短軸15cmの楕円形。	9cm	黒褐色シルト	
P9	ピット	△ ⑪	長辺約30cm、短辺約15cmの楕円方形。	16cm	黒褐色シルト	
P10	ピット	△ ⑫	長軸約30cm、短軸約15cmの不規則形。	14cm	黒褐色シルト	
P11	ピット	○ ⑬	径20cmの圓形。	16cm	黒褐色シルト	
P12	ピット	△ ⑭	径22cmの圓形。	17cm	黒褐色シルト	



第13図 ピット・その他の出土遺物

## 第4章 総括

### 1. 遺構について

今回の都市計画道路（県道）源光町田線改良工事に伴う発掘調査では、竪穴遺構1基、溝跡3条等を検出した。

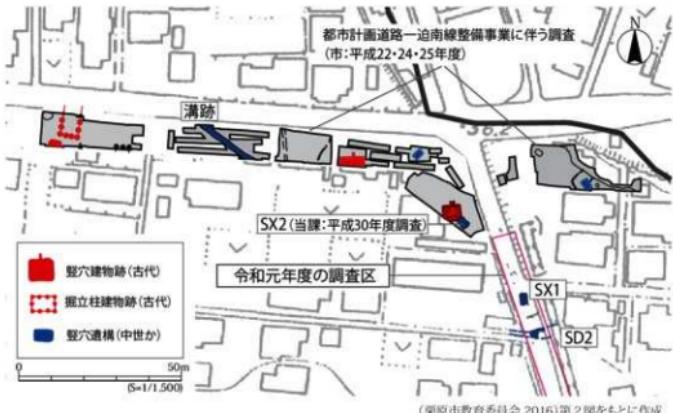
SX1 竪穴遺構は平面形が歪んだ長方形を呈し、短辺の中央に柱穴を伴う。床面から礫が1点出土しているが、年代を決定し得る遺物は出土していない。遺構北東隅の床面直上には炭化物・焼土の分布が認められ、一度に埋め戻されている。

遺構の類例をみると、平成30年度に当課が実施した源光遺跡の調査でも、形状・規模・堆積土が類似したSX2 竪穴遺構を検出している（宮城県教育委員会2019）。また栗原市教育委員会からの御教示によれば、都市計画道路一迫南線整備事業に伴う調査でも竪穴遺構を検出しているという。ただし、遺構の方向に規則性は認められないようである（第14図）。また、近隣の木戸遺跡（宮城県教育委員会1980b）や原田遺跡（宮城県教育委員会2009）、栗原市高清水に所在する観音沢遺跡（宮城県教育委員会1980d）でも同様の遺構が検出されている。特に原田遺跡 SX04・SX07B 竪穴遺構は、短辺中央の柱穴や北壁付近の床面に炭化物・焼土が分布している点で、SX1との類似性が高い。

これらの遺構の年代観に関しては、木戸遺跡では中世陶器が、観音沢遺跡では中世陶器と北宋銭が出土していることから、両遺跡の竪穴遺構は中世に属すると考えられている（宮城県教育委員会1980b・d）。原田遺跡と源光遺跡の竪穴遺構は遺物から遺構年代は特定されていないが、両者とも木戸遺跡の竪穴遺構と特徴が類似するため、中世に属する可能性が指摘されている（宮城県教育委員会2009・2019）。なお、前者の竪穴遺構は中世以降と考えられる掘立柱建物跡の集中域に重なっている。後者は遺構の切り合い関係から、古代の竪穴建物跡（灰白色火山灰の堆積状況から、10世紀前葉頃には埋没しつつあったと考えられる）より新しいことが確認されている。

陸奥南部における中世の竪穴遺構について、飯村均氏は①1辺2~4mの方形を基調とする、②堆積土は人為的埋め戻しである、③共伴遺物がない（少ない）、④床面が踏み締まっているものが少ない、⑤長期の使用が認められない、といった特徴をあげている（飯村1994）。今回の調査で検出したSX1もこれらの特徴に合致するものである。木戸遺跡等近隣における中世の竪穴遺構と形状・規模等が類似することもあわせると、SX1も中世に属する可能性が高い。

SD2 溝跡は断面が「V」字形を呈する東西方向の溝跡で、堆積土に地山ブロックを含んでいる。遺



第 14 図 源光遺跡調査地点と遺構分布

物は堆積土から縄文土器小破片が出土している。

栗原市教育委員会からの御教示によれば、今回の調査区より北西の地点において、SD2 と規模や堆積土が類似した溝跡を検出しているという（第 14 図）。この溝跡は上幅 1.7 m、下幅及び検出面からの深さが 0.5 m の溝跡で、SD2 と同様堆積土に地山ブロックを含んでいる。ただし、断面が逆台形状を呈する点では SD2 と様相が異なる。時期は堆積土から中世陶器が出土しているため、中世以降と考えられている。

ここで各遺構の堆積土に着目すると、SD2 や市教委検出の溝跡、SX1・SX2 竪穴遺構は堆積土が地山ブロックを含む点で共通する。この点を積極的に評価した場合、これらの遺構は近接した時期に属することが推察され、SD2 についても中世に属する可能性がある。SD2 が市教委検出の溝跡と同一の遺構か否かは現状では不明であるが、今後竪穴遺構との関係性も踏まえて検討していく必要がある。

## 2. 遺物について

縄文土器は SX1 竪穴遺構や SD2 溝跡の堆積土、ピット等から少量出土しており、それらは地文の施文後に隆帯の貼り付けや並行沈線文が施されている。同様の特徴を有する土器群には高柳遺跡第Ⅱ群土器などがあり、大木 8a・b 式、すなわち縄文時代中期中葉に位置付けられている（仙台市教育委員会 1995）。先述のように SX1 竪穴遺構、SD2 溝跡は中世、もしくは中世以降のものである可能性が高く、両者の堆積土から出土した縄文土器は周辺から二次的に混入したものと考えられる。同時期の遺物は源光遺跡の平成 30 年度調査区の南東付近においても分布することから、この付近に当該期の未確認の遺構が存在する可能性がある。

### 3.まとめ

1. 調査の結果、竪穴遺構 1 基、溝跡 3 条等が検出された。SX1 竪穴遺構は遺物から年代を特定することはできないが、規模や形状、堆積土の特徴から、中世に属する可能性が高い。また、SD2 溝跡は過去に栗原市教育委員会が遺跡内で確認した中世以降の溝跡と堆積土が類似する。
2. 源光遺跡は過去の発掘調査から古代を主体とする遺跡と考えられるが、中世とみられる遺構や縄文土器の出土も知られており、今回の調査でもそれらの分布が確認された。

#### 引用・参考文献

- 飯村均 1994 「中世の「宿」「市」「津」—陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物—」『中世都市研究』第 3 号 pp.29-42
- 中世都市研究同人会
- 栗原市教育委員会 2006 ~ 2011, 2013 ~ 2019 「伊治城跡」栗原市文化財調査報告書第 1, 4, 7, 9, 11, 13, 17, 19, 21, 24, 25 集
- 栗原市教育委員会 2012 「源光遺跡」栗原市文化財調査報告書第 15 集
- 栗原市教育委員会 2015 「平成 26 年度 史跡伊治城・源光遺跡発掘調査の概要」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.117-124 古代城柵官衙遺跡検討会
- 栗原市教育委員会 2016 「下萩沢遺跡」栗原市文化財調査報告書第 20 集
- 仙台市教育委員会 1995 「高柳遺跡」仙台市文化財調査報告書第 190 集
- 築館町教育委員会 1988 ~ 2001, 2004, 2005 「伊治城跡」築館町文化財調査報告書第 1 ~ 14, 17, 19 集
- 築館町教育委員会 2002 「伊治城跡・嘉倉貝塚」築館町文化財調査報告書第 15 集
- 築館町教育委員会 2003 「嘉倉貝塚」築館町文化財調査報告書第 16 集
- 築館町教育委員会 2005 「鶴澤遺跡」築館町文化財調査報告書第 18 集
- 宮城県教育委員会 1979 「宇南遺跡」宮城県文化財調査報告書第 59 集
- 宮城県教育委員会 1980a 「原田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 63 集
- 宮城県教育委員会 1980b 「木戸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 69 集
- 宮城県教育委員会 1980c 「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集
- 宮城県教育委員会 1980d 「觀音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 集
- 宮城県教育委員会 1981 「鶴ノ丸遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 81 集
- 宮城県教育委員会 1982 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第 83 集
- 宮城県教育委員会 1983 「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第 93 集
- 宮城県教育委員会 2003 「嘉倉貝塚」宮城県文化財調査報告書第 192 集
- 宮城県教育委員会 2009 「原田・下萩沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第 219 集
- 宮城県教育委員会 2012 「大天馬遺跡」宮城県文化財調査報告書第 231 集
- 宮城県教育委員会 2016a 「大天馬遺跡・後沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第 241 集
- 宮城県教育委員会 2016b 「御駒堂遺跡・堂の沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第 244 集
- 宮城県教育委員会 2019 「源光遺跡」宮城県文化財調査報告書第 249 集



1. ③地点（南から）



2. ①地点（北から）



3. SX1 東側（東から）



4. SX1 西側（南から）



5. SX1 断面（西から）



6. SX1 北東部（東から）



7. SX1 碑出土状況（南から）

写真図版 1 SX1 穴遺構



1.SX1-P2 断面（西から）



2.SD2 溝跡断面（西から）



3.SD1 溝跡断面（南から）



3.SD3 溝跡（東から）



4.SD4 溝跡（西から）



6.P4 断面（西から）



7.P5 断面（東から）



8.P6 断面（北から）

写真図版 2 SX1 竪穴遺構, SD2・3・4 溝跡, 柱穴・ピット

# 東島田原遺跡 上足沢遺跡

## 調査要項

遺跡名：東島田原遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 No. 04069） 遺跡記号：AHS

上足沢遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 No. 04071）

所在地：宮城県刈田郡七ヶ宿町字東島田原、下島田原、東谷地山

調査原因：農地中間管理機構関連農地整備事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

調査期間：令和元年 11月 18日～11月 29日

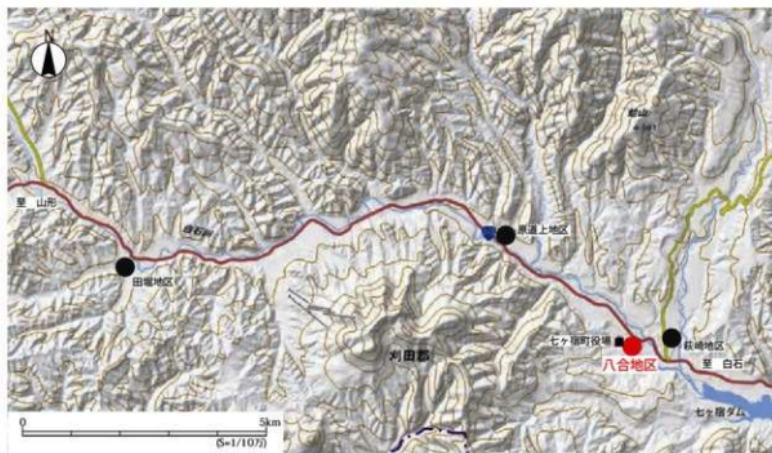
調査面積：約 550m<sup>2</sup>

調査協力：七ヶ宿町教育委員会 七ヶ宿町農林建設課 宮城県大河原地方振興事務所

調査員：古田和誠 黒田智章 矢内雅之

## 第1章 調査に至る経緯

平成25年に制定された「中間管理法」に基づき、各都道府県では農地中間管理機構による農地の集積・集約化（農地中間管理機構関連農地整備事業）が進められている。当該事業に伴い、七ヶ宿町は平成30年度以降、県教育庁文化財課（以下、当課）の協力のもと、分布調査及び確認調査を実施している（第1図）。詳細は七ヶ宿町文化財調査報告書第6集『松木沢遺跡ほか』を参照されたい。このうち、事業計画地内の八合地区（第1図）に関しては確認調査の結果遺構の検出は無く、遺物は散在的な出土であったことから、本発掘調査は不要と判断された。しかし、その後事業計画に変更が生じ、東島田原遺跡及び上足沢遺跡の隣接地（6.226ha）が八合地区に追加編入される見込みとなった。これを受け、該当箇所まで両遺跡が広がるかどうかを把握するため、国庫補助事業で確認調査を実施することとした。



第1図 確認調査対象地区の位置

## 第2章 遺跡の概要

### 1. 地理的環境

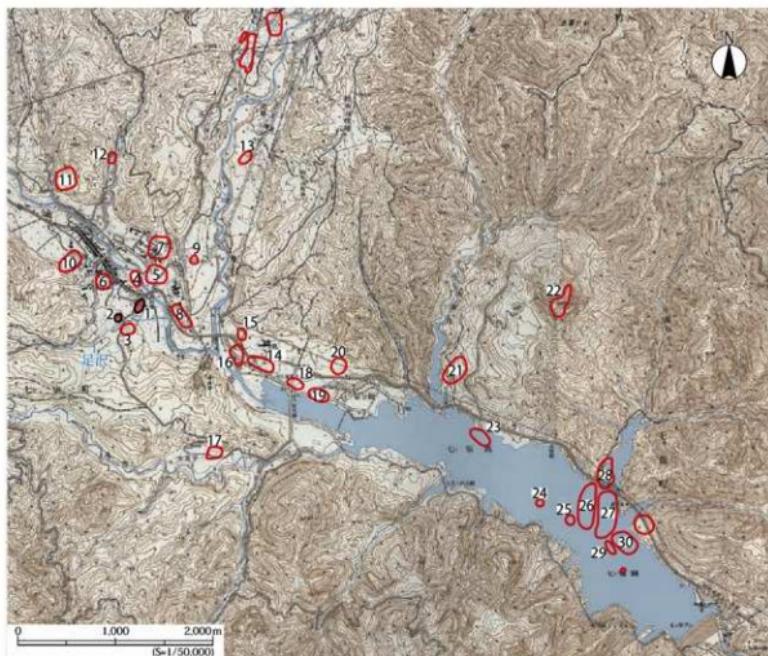
東島田原遺跡・上足沢遺跡の所在する七ヶ宿町は宮城県南西端に位置し、山形県、福島県に隣接している。同町は全体が奥羽山脈に含まれ、町内のほぼ中央を東流する白石川により河岸段丘が形成されている。現在の町並みはこの段丘上に営まれている。また、白石川左岸の河岸段丘は北から流下する横川・大梁川・小梁川により開析されている。七ヶ宿ダム開発に伴う発掘調査等により、こうした河川合流点の段丘緩斜面上には、縄文時代の集落が多数分布することが明らかとなっている。

## 2. 歴史的環境

七ヶ宿町内には、古墳時代を除く旧石器時代から近世にかけての遺跡が多数分布する。その大部分は縄文時代の遺跡である。以下では、今回の調査に関連する縄文時代の遺跡について概観する。

縄文時代早期の遺跡として、小梁川遺跡（26）では早期末葉及び早期末～前期初頭の竪穴建物跡が検出されている（宮城県教育委員会 1987）。大倉遺跡（30）では早期末～前期初頭の竪穴建物跡、埋設土器遺構等が検出されている（宮城県教育委員会 1985b）。

前期前葉の遺跡としては、小梁川遺跡（26）において竪穴建物跡が検出されたほか（宮城県教育



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	栗魚田原遺跡	段丘	散布地	縄文中期	16	夏磐平道跡	段丘	散布地	縄文早・前
2	上足沢遺跡	段丘	散布地	縄文	17	大貫平道跡	丘陵斜面	散布地	縄文
3	中高瀬遺跡	段丘	散布地	縄文前・中	18	上足見道跡	段丘	散布地	縄文
4	内川遺跡	段丘	散布地	縄文期	19	町道道跡	段丘	散布地	縄文
5	次田遺跡	段丘	散布地	縄文中期～後	20	船名道跡	段丘	散布地	縄文・古代
6	内川B遺跡	段丘	散布地	縄文	21	大谷川遺跡	丘陵斜面	集落	縄文中期・後
7	長下道跡	段丘	集落	縄文中期	22	右谷鉢(アリ谷鉢跡)	丘陵	城館	中世
8	蔵崎平道跡	段丘	散布地	縄文・古代	23	原道跡	段丘	散布地	縄文早・前
9	蔵崎遺跡	丘陵	散布地	古代	24	原道跡	段丘	散布地	縄文
10	八幡前跡	丘陵	城館	中世	25	原川道跡	段丘	散布地	縄文
11	神林A遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文中期・後	26	小梁川遺跡	段丘	集落	縄文前～後・平安
12	神林B遺跡	段丘	散布地	縄文前期	27	小梁川東道跡	段丘	集落	旧石器・縄文中期～後・平安
13	大原遺跡	段丘	散布地	縄文中期・後	28	西林山道跡	段丘	集落	縄文前・中
14	矢立遺跡	段丘	散布地	縄文	29	通道跡	段丘	集落	縄文早・前・後・令和
15	矢立内道跡	丘陵	散布地	縄文中期～後・古代	30	大倉遺跡	段丘	集落	縄文早・前・後

第2図 東島田原・上足沢遺跡と周辺の遺跡

委員会 1987), 原頭遺跡 (23), 若林山遺跡 (28) でも前期初頭に比定される土器が出土している (宮城県教育委員会 1985c・1986)。なお、今回の調査対象地付近に所在する中高瀬遺跡 (3) も、当該期を含む散布地として登録されている。

前期末葉から中期前葉にかけては、小梁川遺跡 (26)において大型竪穴建物跡を含む多数の竪穴建物跡、フラスコ状土坑、土坑墓、埋設土器、遺物包含層等が検出され、集落の構成や変遷過程などが明らかとなった (宮城県教育委員会 1986・1987)。

中期中葉においては、長下遺跡 (7) で大木 8 式の土器や石器、土坑などの遺構が発見されている (七ヶ宿町教育委員会 1977)。小梁川遺跡 (26)においても竪穴建物跡、フラスコ状土坑、土坑墓、埋設土器等が検出されているが、同遺跡の集落は当該期をもって終焉を迎える (宮城県教育委員会 1987)。

中期後葉の遺跡としては、小梁川東遺跡 (27) で竪穴建物跡と埋設土器が検出されている (宮城県教育委員会 1985a)。大梁川遺跡 (21) はより規模の大きな集落が営まれていたと推測され、竪穴建物跡、埋設土器、複式炉、遺物包含層等が検出されている (宮城県教育委員会 1988a)。なお、今回の調査対象地に隣接する東島田原遺跡 (1) も当該期の散布地として登録されている。

後期初頭の遺跡としては、大梁川遺跡 (21) で竪穴建物跡や敷石遺構が (宮城県教育委員会 1988a), 小梁川東遺跡 (27) で土坑が検出されている (宮城県教育委員会 1985a)。このほか、今回の調査対象地周辺では内川遺跡 (4), 宮田遺跡 (5), 神林 A 遺跡 (11) なども晩期を含む散布地として登録されている。

### 第 3 章 調査成果

#### 1. 調査の方法と経過

今回の確認調査の対象地（以下、対象地）は八合地区的うち、上足沢遺跡から北東方向へ徐々に降る緩斜面と、そのさらに北東にある東島田原遺跡に近接した平坦地である（第 3 図）。この 2か所の対象地は、いずれも平成 30 年度の調査地点より遺跡範囲に近接した箇所となる。両者とも現状は水田・休耕田などとなっている。確認調査は町教育委員会、町農林建設課、県教育庁文化財課、県大河原地方振興事務所の四者による事前協議を踏まえ、11 月 18 日から開始した。

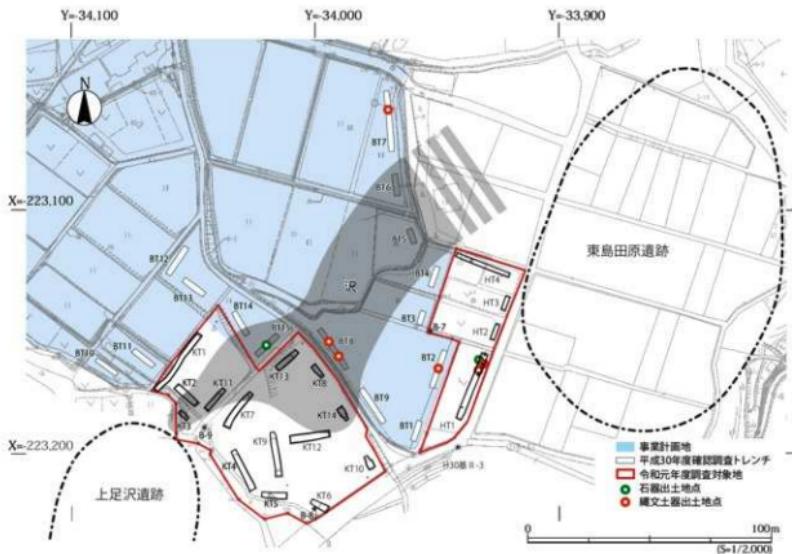
確認調査トレントは、上足沢遺跡近接地に 14 本 (KT 1 ~ 14), 東島田原遺跡近接地に 4 本 (HT 1 ~ 4) 設定した。各トレントは長さ約 5 m ~ 30 m, 幅約 1.6 m ~ 3 m, 深さ約 30cm ~ 180cm である。

表土掘削にはバックホー (0.25m<sup>3</sup>) を使用した。平面図の記録に際しては、トータルステーション及び電子平板システム（遺構くん）を使用し、各トレントで地層の柱状図（略図）を作成した。平面図作成時に使用した工事用基準点は、以下の通りである。

H30 基 II -3 : X= - 223197.494 Y= - 33941.640 B-7 : X= - 223149.782 Y= - 33953.007

B-8 : X= - 223222.736 Y= - 34000.663 B-9 : X= - 223189.457 Y= - 34045.653

写真撮影には、一眼レフデジタルカメラ (Nikon D5600 2,416 万画素) を使用した。



第3図 調査対象範囲と調査区

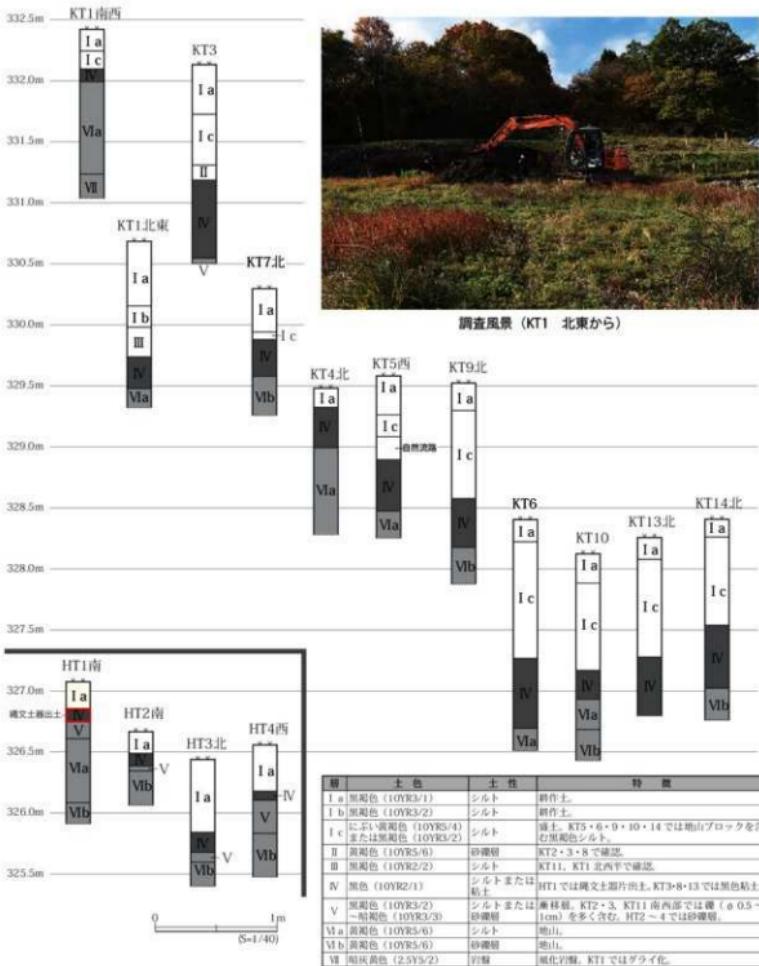
11月28日に町教育委員会、町農林建設課、県教育庁文化財課、県大河原地方振興事務所の四者で調査結果の報告と今後の対応について、現地打ち合わせを行った。翌11月29日にトレンチを埋め戻し、調査を終了した。

## 2. 調査の概要

### (1) 基本層序

対象地内においては、第4図に示すI～VII層を確認した。

I層はIa層（耕作土）、Ib層（旧耕作土）、Ic層（盛土）に細分できる。その下層のII層（黄褐色砂礫層）とIII層（黒褐色シルト）はいずれも部分的に残存しており、前者はKT2・3・8に、後者はKT11とKT1の北西部に残存していた。IV層（黒色シルトまたは粘土）は対象地全体に分布していたが、特にKT3・5・6・8・11では厚さ40～60cmと比較的厚く堆積していた。また、KT1ではIV層が田面形成に伴い一部削平を受けているものの、概ね南西から北東にかけて、徐々に標高を下げつつ堆積している様相を確認した。IV層の土性はKT3・8・13では粘土、それ以外ではシルトである。なお、HT1ではIV層から縄文土器片が1点出土した。IV層の下層はV層（漸移層）、VI層（地山）、VII層（岩盤）である。VI層はVIa層（黄褐色シルト層）とその下層のVIb層（黄褐色砂礫層）に細分できる。VIa層上面では、後述するように柱穴・ピットや自然流路跡を検出した。



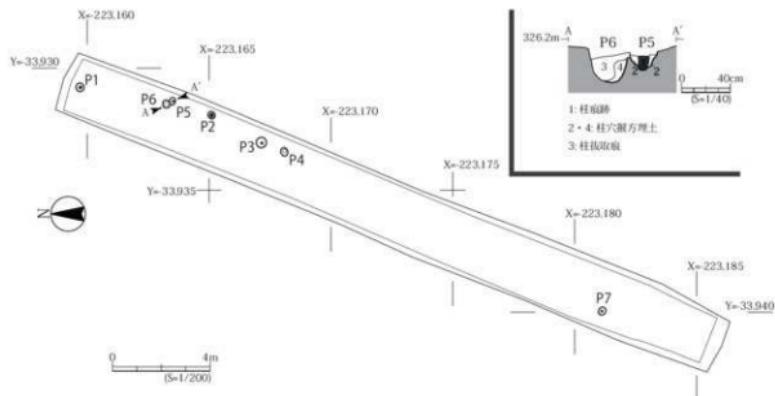
第4図 基本層序

## (2) 検出遺構と遺物

遺構は、HT1 で柱穴 6 個 (P1 ~ 3, P5 ~ 7) とピット 1 個 (P4) を検出した (第5図)。検出面は VIa 層 (黄褐色シルト) である。柱穴の平面形は直径 23 ~ 30cm の円形で、検出面からの深さは 30cm 前後である。柱穴掘方埋土は地山 (VIa 層ブロック) を含む暗褐色または黒褐色シルトで、い

ずれもしまりはない。堆積土の状況から、時期は近代以降と考えられる。このほか、遺構ではないがKT5・HT4で自然流路跡を検出した。前者は北西→南東方向、後者は南→北方向である。

遺物は、HT1でP6柱穴から石器（剥片）が1点、IV層（黒色シルト層）とP5柱穴から縄文土器小破片が1点ずつ出土した（第6図）。



第5図 HT1 柱穴・ピット



第6図 HT1 出土遺物

## 第4章 総括

### 1. 遺構について

対象地の旧地形に関して、北西部（KT1付近）ではIV層の堆積状況により、南西の上足沢遺跡が所在する丘陵から北東方向へ降る緩斜面が存在したと考えられる。その東側においては、平成30年度の調査時に南西→北東方向の沢（埋没）の存在が想定されている（七ヶ宿町教育委員会2021）。中央部（KT8・13・14付近）ではIV層（黒色シルトまたは粘土）が厚く堆積していることから、この場所も沢に由来する湿地であったことが推測される（第3図）。また、KT4・5・6にかけてもIV層が標高を下げるとともに徐々に層の厚さを増している。遺跡の南を足沢が東流していることを考慮すると（第2図）、この付近も河川の浸食を受け落ち込んでいたことが想定される。

河川の浸食を受けていないHT1付近にはVIa層（黄褐色シルト）が比較的広範に分布しており、HT1では、柱穴・ピットを計7個検出した。これらの柱穴は堆積土の特徴から近代以降のものと考えられる。柱穴や付近のIV層から縄文土器や石器が少量出土したが、これらはいずれも隣接する東島田原遺跡、もしくは丘陵上の上足沢遺跡からの流れ込みとみられる。また、今回の対象地に隣接するBT2・7・8・15（平成30年度調査）においても縄文土器や石器が少量出土している（第3図）。土器はいずれも細片であり、沢（埋没）にかけて傾斜する地点から散在的に出土しているため、これらの遺物も東島田原遺跡や上足沢遺跡から流れ込んだものと考えられる。

なお、東島田原遺跡・上足沢遺跡の範囲はいずれも対象地までは広がらず、前者は対象地外北東の段丘突端部を中心に、後者は対象地外南西の丘陵上に展開することが想定される。

## 2. 遺物について

HT1において出土した縄文土器小破片（第6図2）は胎土に纖維を含み、外面に縄文、内面に条痕文が施されたものである。こうした土器は岩沼市鶴ヶ崎城跡出土の第Ⅲ群土器（岩沼市教育委員会2005）や、山元町北経塚遺跡SI25 竪穴建物跡出土土器（山元町教育委員会2010）などに類例がある。前者は縄文時代早期末葉の梨木畠式、後者は前期初頭の上川名式に比定されている。

## 3.まとめ

調査の結果、HT1では堆積土から近代以降と推定される柱穴・ピットを検出したほか、柱穴堆積土や周辺の黒色土から縄文土器、石器が少量出土した。遺物はいずれも隣接する東島田原遺跡や上足沢遺跡からの流れ込みと考えられる。出土土器から、縄文時代早期末葉～前期初頭頃を含む集落が周辺に存在した可能性がある。

### 引用・参考文献

- 岩沼市教育委員会 2005『鶴ヶ崎城跡第一4地点発掘調査報告書一』岩沼市文化財調査報告書第6集
- 七ヶ宿町教育委員会 1977『長下遺跡調査概報』七ヶ宿町文化財調査報告書第1集
- 七ヶ宿町教育委員会 2021『松木沢遺跡ほか』七ヶ宿町文化財調査報告書第6集
- 早瀬亮介 2017『仙台湾周辺における前期初頭縄文土器の変遷と空間変異』『物質文化』97号 pp.35-57 物質文化研究会
- 宮城県教育委員会 1985a『小梁川東遺跡』『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第107集
- 宮城県教育委員会 1985b『大倉遺跡』『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第107集
- 宮城県教育委員会 1985c『若林山遺跡』『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第107集
- 宮城県教育委員会 1986『小梁川遺跡遺物包含層土器編』『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第117集
- 宮城県教育委員会 1987『小梁川遺跡』『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第122集
- 宮城県教育委員会 1988a『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第126集
- 宮城県教育委員会 1988b『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書付編』宮城県文化財調査報告書第126集
- 山元町教育委員会 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第4集



1. KT1 北西壁断面（南東から）



2. KT2・3（南東から）



3. KT3 南西壁断面（北東から）



4. KT4 南西壁北側断面（北東から）



5. KT5 自然流路跡跡（北西から）



6. KT6（西から）



7. KT8（南から）



8. KT9（南東から）

#### 写真図版1 上足沢遺跡近接地調査写真



1. KT10 北東・南東壁断面（西から）



2. KT11（南から）



3. KT13（北から）



4. KT14（東から）



5. HT1（南西から 正面奥が東島田原遺跡）



6. HT1 P5・P6 断面（南西から）



7. HT2（南から）



8. HT4 自然流路跡（南から）

#### 写真図版2 上足沢遺跡・東島田原遺跡近接地調査写真

# おたまや遺跡

## 調査要項

遺跡名：おたまや遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 60058、遺跡記号 YW）

所在地：宮城県本吉郡南三陸町志津川字竹川原地内

調査原因：県道志津川登米線災害復旧工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成 28 年 1 月 18 日、2 月 15 日～3 月 7 日

調査面積：約 240m<sup>2</sup>

調査協力：南三陸町教育委員会 生涯学習課 三浦彩子

調査員：生田和宏 黒田智章

## 第1章 調査に至る経緯

本調査は、東日本大震災で被災した県道志津川登米線の復旧事業に伴う発掘調査である。復旧道路は、おたまや遺跡の隣接地にあたる丘陵裾部に計画されたため、遺跡との係わりが生じた。このため、宮城県土木部気仙沼土木事務所より発掘通知が提出され、その後、宮城県教育委員会、南三陸町教育委員会、宮城県土木部気仙沼土木事務所で対応について協議を行い、平成28年1月18日に確認調査を開始したところ、1トレンチで竪穴建物跡等の遺構を検出した。これを受け、平成28年2月15日から1トレンチ付近を拡張して遺構の広がりを精査したところ、竪穴建物跡・焼土遺構・溝跡・遺物包含層などを検出し、内容を確認する調査を実施した。実測図の作成・写真記録を行って、3月7日に埋め戻し、調査を終了した。

なお、今回の発掘は復興事業に伴う調査にあたる事から、宮城県教育委員会が定めた「東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」(平成23年6月3日付け文第268号)の「II-2-(3) 本発掘調査の範囲等」の基準が適用された。このため、盛土工事部分は基本的に遺構の検出及び部分的な精査のみを行うこととした。

## 第2章 遺跡の概要

### 1. 地理的環境

おたまや遺跡は、南三陸町志津川字竹川原に所在し、南三陸町役場から西へ2.2kmの場所に位置する。志津川湾に注ぐ水尻川の下流左岸、北西から南東へ延びる丘陵の南東側斜面（標高20～10m）からその南側裾部に立地している。東へ0.7km程で海岸に至るが、西側は標高100mを超える丘陵が間近に迫っている。現地は宅地や畠地として利用されている。

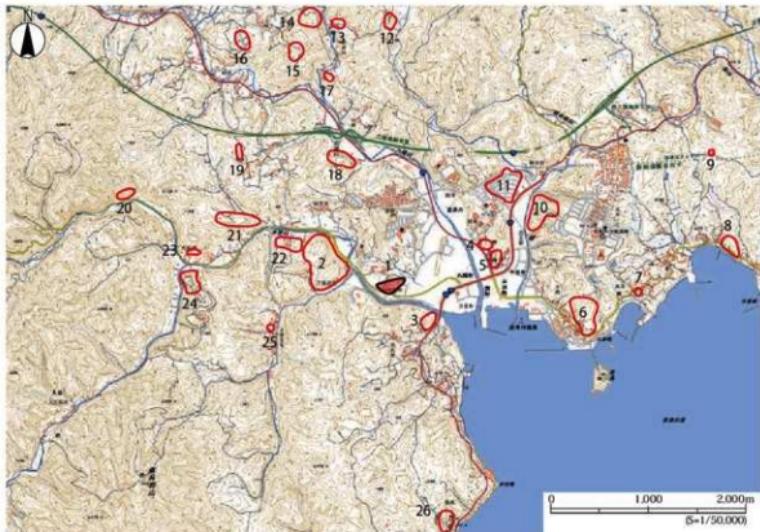
県道志津川登米線は、水尻川河口付近からおたまや遺跡の南側を通り、羽沢峠を経て北上川及び登米市登米へと至る道路となっている。

### 2. 歴史的環境

おたまや遺跡は古代の散布地として登録されている遺跡である。これまでに3次にわたる調査が行われており、第1次調査および第2次調査では遺構・遺物とも発見されていない（南三陸町教育委員会2018）。平成27年度に被災地域農業復興総合支援事業として、農業機械格納庫並びに水稻乾燥調製施設建設工事に伴って実施された第3次調査では、縄文時代早期後葉～前期前葉頃の焼土遺構や土坑、平安時代（9世紀頃）の竪穴建物跡3棟などが検出されている（南三陸町教育委員会2018）。南三陸町内で初めて発見された古代の集落遺跡である。

おたまや遺跡周辺では、東日本大震災以降、復興事業に伴う発掘調査などにより、いくつかの遺跡でその様相が明らかになってきている。

縄文時代では、水尻川河口に位置する大久保貝塚で主に縄文時代晩期の土器・石器・骨角器・動物



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	おたまや遺跡	丘陵	散在地	古代	14	佐倉跡	丘陵	城館	中世
2	旭館跡	丘陵麓	城館	中世	15	松久館跡	丘陵	城館	中世
3	大久保日塚	丘陵斜面	日塚	彌文	16	秋の平遺跡	丘陵	散在地	彌文
4	城堀山遺跡	丘陵麓	散在地	彌文	17	行人塚	丘陵麓	塚	不明
5	上の大山遺跡	丘陵	散在地	彌文	18	千人塚	丘陵	塚	不明
6	論西跡	丘陵尾根	城館	中世	19	小森跡	丘陵麓	城館	中世
7	袖沢遺跡	丘陵麓	散在地	彌文	20	内丸寺跡	丘陵斜面	寺院・板碑群	中世
8	平瀬館跡	丘陵	城館	中世	21	津波若館跡	丘陵	城館	中世
9	孤壠	丘陵麓	塚	不明	22	大木遺跡	丘陵麓	散在地	彌文
10	加須館跡	丘陵尾根	城館	中世	23	人形の板碑跡	丘陵麓	板碑群	中世
11	新井山館跡	丘陵	城館	中世	24	平山館跡	丘陵	城館	中世
12	坂出館跡	丘陵麓	散在地	彌文	25	前寺塚	丘陵	塚	不明
13	秋田山遺跡	沖縄平野	散在地	彌文	26	加納館跡	丘陵	城館	中世

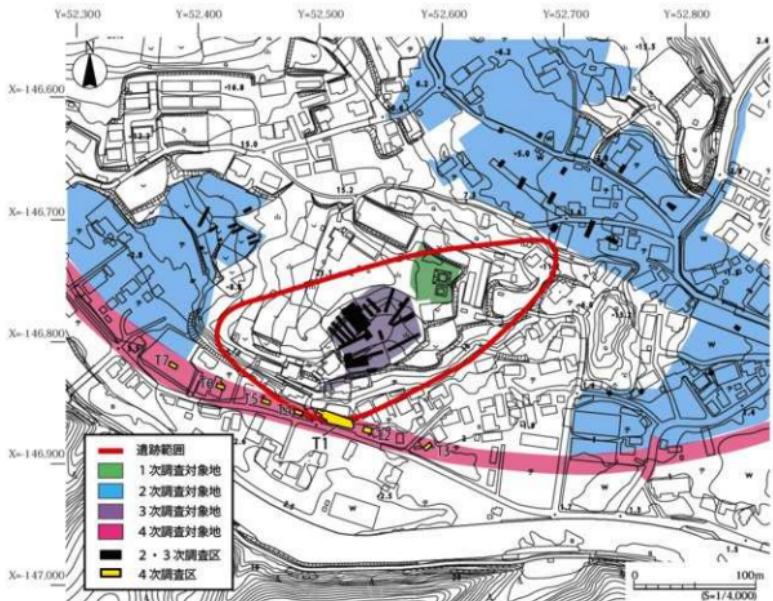
第1図　おたまや遺跡と周辺の遺跡

遺存体等が採集されており（志津川町 1991），令和元年度から実施されている水尻川堤防建設（復興事業）に伴う発掘調査でも多くの資料が得られている。これに続く弥生時代・古墳時代の様相は不明である。

奈良・平安時代の遺跡は、町内全域を見渡してもきわめて少なく、平安時代末に築造された田東山経塚群や寂光寺跡などを除くと、おたまや遺跡と戸倉地区に所在する上沢前II遺跡（古代の散在地）の2遺跡のみしか知られていない。

中世に入ると志津川周辺には多数の城館が造られる。おたまや遺跡のすぐ西側に位置する旭館跡は志津川最大の中世城館で、近年は付近に所在する板碑も含めて調査が進められている（田中 2016・2018）。新井田館跡は近年復興事業に伴い城跡の全面が発掘調査され、文献資料の乏しい三陸地域の中世史を考える上で重要な成果が得られている（南三陸町教育委員会 2016、村上 2017）。

なお、現在、街中心部に近い上の山地区にある海円寺は、かつておたまや遺跡の周辺に鎮座してい



第2図 おたまや遺跡調査区配置図

たが、近世初頭に志津川の町割りに伴って移されたと伝えられている（志津川町 1991）。また、当地の集落（中瀬町）に古くから伝わる各家の屋号には、旭館やそれに関係するとみられる人物らにまつわる名称（オタマヤ・田山・隠居・大下・寺前など）が残されており（志津川中央公民館 1993），この場所が旭館跡と何らかの結びつきをもつ場所であることを窺わせる。

### 第3章 調査成果

#### 1. 調査の方法と経過

今回の調査は平成 28 年の確認調査で遺構が確認された 1 トレンチ周辺部分を対象とするもので、調査面積は約 240m<sup>2</sup>である。

発掘調査は平成 28 年 2 月 15 日から開始した。確認調査で遺構を検出した 1 トレンチ周辺部分を拡張する形で調査区を設定し、掘削・精査を行った。その結果、竪穴建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 2 棟、柱穴列 3 条、焼成遺構 1 基、土坑 28 基、溝跡 3 条、ピット 147 個、および遺物包含層を検出した。

調査区や遺構の平面図作成にあたっては電子平板を使用し、測量に際し工事用基準杭の座標値を利用した。基準点の座標（世界測地系第 X 系）は次の通りである。

R64 : X = - 146859.416 Y = 52513.393

No.43 + 14 : X = - 146856.049 Y = 52499.169

また、適宜 1/20 の縮尺で断面図を作成した。写真撮影には 2,620 万画素のデジタルカメラを使用した。精査および記録作成については 3 月 4 日に終了した。調査区は全体に山砂を敷き詰めて遺構の保存を講じた上で、3 月 7 日～8 日に重機による埋め戻しを行い、調査の一切を終了した。

## 2. 基本層序

調査区内はかつて宅地や畠として利用されており、現表土の下に厚さ 70cm 程の盛土（現代）を確認した。遺構確認面はIV層である。

I 層：黄褐色（10YR5/6）シルト。表土。層厚 15cm。

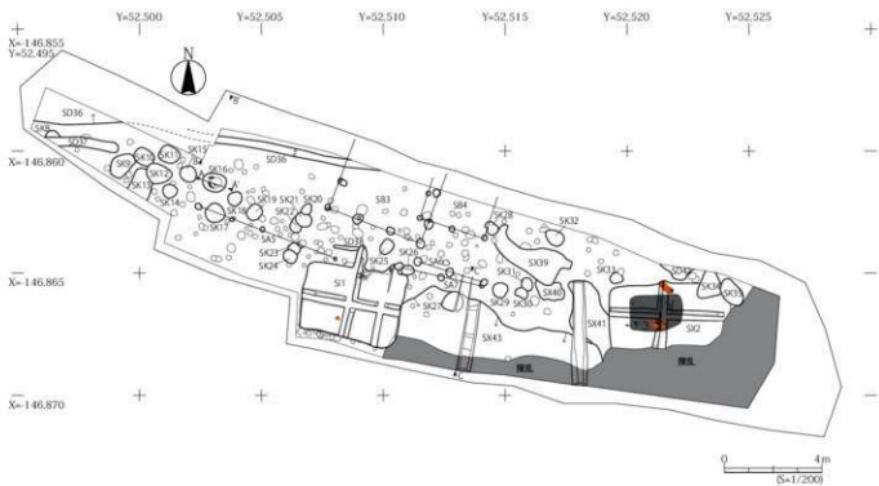
II 層：暗褐色（10YR3/3）シルト。盛土。層厚 70cm。径 5 ～ 10mm の小礫を多量に含む。

III 層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト。旧表土。層厚 10cm。径 10 ～ 50mm の礫を少量含む。

IV 層：黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト。地山。層厚 10cm 以上。

## 3. 検出遺構と遺物

今回の調査では、竪穴建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 2 棟、柱穴列 3 条、焼成遺構 1 基、土坑 28 基、溝跡 3 条、ピット 147 個、遺物包含層を検出した（第3図）。調査は復興事業の取り扱いにより、遺構の検出及び新旧関係や時期を把握するための、必要最小限の一部断ち割りに留めたため、時期や性



第3図 遺構配置図

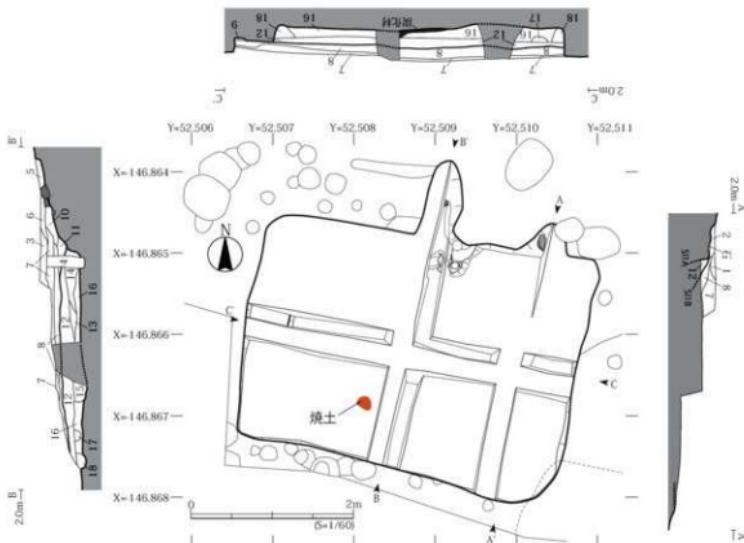
格等の詳細は明確にできない部分がある。

遺物には縄文土器、土師器壺・壺、須恵器壺、中世陶器があり、総量はコンテナ約3箱分である。その多くが小破片であるため、遺構の時期を推定できる遺物や、特筆すべき遺物について掲載した。

### (1) 積穴建物跡

【SI1 積穴建物跡】(第4・5図)

調査区中央南側で検出した。SX43 遺物包含層と重複しており、これよりも新しい。南東隅が一部後世の擾乱を受けている。また、SI1 積穴建物跡は1回拡張されており、SI1A 積穴建物跡→SI1B 積



番号	土色	土性	特徴
1	灰褐色 (2.SVR4/2)	砂質シルト	地土 (建物発掘を伴うものか)
2	黒褐色 (10YR3/1)	砂質土	地山小中プロック多量。砂利小中多量。炭多量含む (旧: SI1A 暫避崩落土)
3	褐色 (10YR4/1)	砂質土	地山小中プロック多量。砂利多量。炭多量含む (新: SI1B 堆積土)
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山小中プロック少量含む (土器埋納ビット)
5	褐色 (10YR4/1)	粘土質シルト	地山中プロック少量含む (新: SI1B 墓堆納ビット)
6	褐色 (10YR4/1)	粘土質シルト	地山小中プロック少量含む (新: SI1B 墓堆納落土)
7	褐色 (10YR5/1)	粘土質シルト	地山小中プロック多量含む (新: SI1B 天井崩落土)
8	褐色 (10YR4/1)	砂質土	地山小中プロック多量。砂利小中多量。炭多量含む (新: SI1B 天井崩落土)
9	にぶい褐色 (10YR7/3)	シルト	(新: SI1B 墓堆納植土)
10	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山小プロックを含む (新: SI1B カマド堆積土)
11	灰褐色 (2.SVR4/2)	シルト	地土プロック主体 (新: SI1B カマド堆積土)
12	黒褐色 (10YR3/1)	砂質土	地山小中プロック多量。砂利小中多量。炭多量含む (旧: SI1A 人為堆積土)
13	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質土	地山中プロック少量含む (旧: SI1A 墓堆積土)
14	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山小中プロック多量。地山小中プロックを含む (旧: SI1A 墓堆積土)
15	褐灰色 (10YR4/1)	砂質土	地山小プロック少量含む (旧: SI1A 内土丸?)
16	褐色 (10YR4/1)	粘土質土	地山小プロック多量含む (旧: SI1A 墓堆積土)
17	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質土	地山小プロック少量含む (ビート?)
18	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	地山小プロック少量含む (廻溝埋土?)

第4図 SI1A・B 積穴建物跡

穴建物跡と変遷している。SI1B 竪穴建物跡は、SI1A 竪穴建物跡を 10 ~ 15cm かさ上げ整地し、西辺を 50cm 程拡張させている。

#### 《SI1A 竪穴建物跡》

〔平面形・規模〕 平面形は長方形で、規模は南北が東辺で 3.1m、東西がサブトレンチで確認できた部分で約 3.6m である。

〔方向〕 東辺でみると北で東に約 10° 傾いている。

〔A 床面〕 挖方埋土上面を床面とし、ほぼ平坦である。

〔A カマド〕 北壁東寄りに造られている。煙道及びカマド内堆積土（焼土・炭化物を多量含む）を確認したことからカマドと判断した。床面までの掘り下げを行っていないので、燃焼部や両袖等は確認していない。

〔堆積土〕 1 層を確認した。地山ブロックが多量に含まれる。人為堆積土である。

〔出土遺物〕 堆積土から土器類の小破片や須恵器壺の破片が出土している。

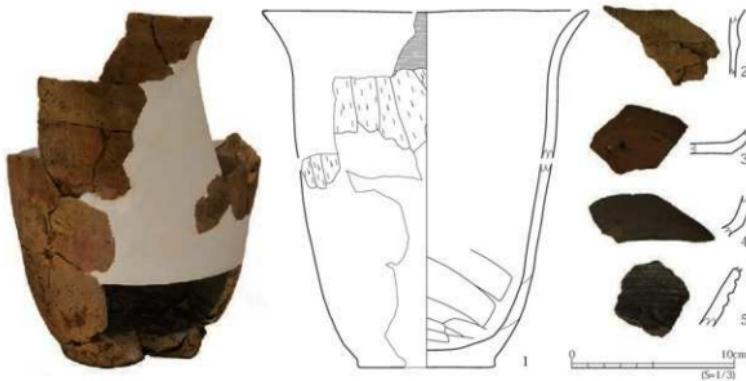
#### 《SI1B 竪穴建物跡》

〔平面形・規模〕 平面形は長方形で、規模は南北が東辺で 3.1m、東西が 4.1m である。

〔方向〕 東辺でみると北で東に約 10° 傾いている。

〔B 床面〕 SI1A 竪穴建物跡をかさ上げ整地し、西辺を約 50cm 西側に拡張させている。

〔B カマド〕 北壁中央に造られている。土層観察用サブトレンチにより東側壁および煙道の残存を確認した。燃焼部が建物内に設けられ、その奥に長さ 0.9m、幅 0.4m ほどの煙道が延びる。カマド構



No.	出土位置	種別	器種	残存	特徴	登録
1	SI1B/4 縁	土師器	甕	1/2	口径 (20.0)・底径 8.4・高さ (21.8), 斜口クロ、外腹ココナデ→へラケズリ、内腹ヘラナデ。底面木炭斑	36_1
2	SI1B/ 堆積層	土師器	甕	破片	体部破片、外腹のC縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	48_3
3	SI1B/ 堆積層	須恵器	高台杯	破片	体下部→高台下部破片	48_1
4	SI1B/ 堆積層	須恵器	环	破片	体下部→底部破片、底面凹凸へら切り	48_2
5	SI1B/ 堆積層	陶文土器	不明	破片	体部破片、浅縁による工字型 (大輪A)	39_1

第 5 図 SI1A・B 竪穴建物跡出土遺物

築土は地山ブロックを多量に含む褐色シルトである。また、カマド燃焼部で検出したピットから土師器の壺が倒位で出土しており、カマド廃棄の祭祀に関わる可能性も想定される。

【堆積土】3層を確認した。このうち中層（7層）および下層（8層）は地山ブロックおよび炭化物を多量に含んでおり、天井崩落土である可能性がある。

【出土遺物】カマド燃焼部のピット（4層）から土師器壺が出土したほか、堆積土から土師器・須恵器・縄文土器の小破片が出土した。

#### （2）掘立柱建物跡

##### 【SB3 掘立柱建物跡】（第3図）

調査区中央部北側で検出した。他の遺構との重複はない。柱穴を7個確認した。南北方向の建物とみられ、規模は桁行2間以上（総長2m以上）、梁行3間（総長約4m）である。方向は東側柱列で東に20°偏する。掘方は25～40cm程度の円形で、埋土は地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

##### 【SB4 掘立柱建物跡】（第3図）

調査区中央部北側で検出した。他の遺構との重複はない。柱穴を4個確認した。南北方向の建物とみられ、規模は桁行1間以上（総長1m以上）、梁行2間（総長約2.7m）である。方向は西側柱列で東に17°偏する。掘方は20～25cm程度の円形で、埋土は地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

#### （3）柱穴列

##### 【SA5 柱穴列】（第3図）

調査区西側で検出した東西方向の柱穴列である。SK23土坑・P52よりも古く、P33よりも新しい。規模は4間（総長約6m）である。方向は西で北に21°偏する。遺物は出土していない。

##### 【SA6 柱穴列】（第3図）

調査区中央で検出した東西方向の柱穴列である。SA7・P118・P142よりも新しい。規模は2間（総長約2.8m）である。方向は西で北に18°偏する。遺物は出土していない。

##### 【SA7 柱穴列】（第3図）

調査区中央で検出した東西方向の柱穴列である。SA6柱穴列よりも古く、SI1竪穴建物跡・SK26土坑よりも新しい。規模は2間（総長約3.4m）である。方向は西で北に13°偏する。遺物は出土していない。

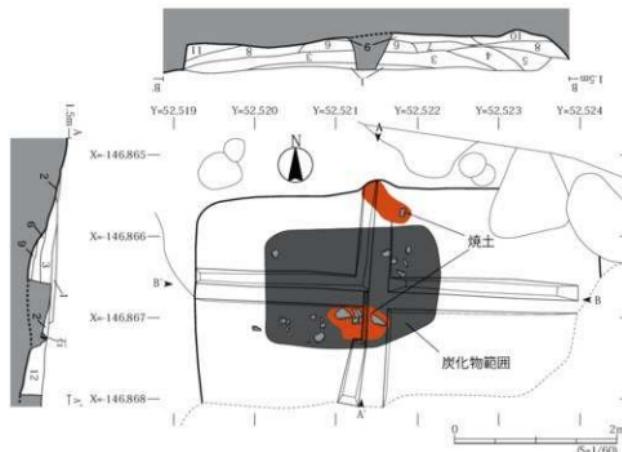
#### （4）焼成遺構

##### 【SX2 焼成遺構】（第6・7図）

調査区東側で検出した。SK34・SK35・SX41と重複しており、SK34・SK35より古く、SX41より新しい。南辺が後世の擾乱を受けている。

〔平面形・規模〕 平面形は攪乱で壊されているため不明である。残存部分は東西 4.9 m、南北 2.9 m である。その上面で方形に広がる炭化物層を確認した。規模は東西 2.1 m、南北 1.5 m で、厚さ 5cm である。炭化物層には拳大的川原石が多数含まれている。また 2箇所で焼土を確認している。炭化物層の下は深さ 30 ~ 40cm ほど掘り下げて、小礫や地山ブロックを含む土を交互に敷き固めた整地とみられる。

〔出土遺物〕 繩文土器の口縁部突起とみられる破片や、土師器甕・須恵器環の破片が出土した。



番号	土色	土性	特徴	番号	土色	土性	特徴
1	黒褐色 (10YR2/1)		炭化物層	7	黒褐色 (10YK2/2)	粘土質シルト	小礫を微量含む。
2	褐褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	小礫を非常に多く含む。しまり無い。	8	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを微量含む。
3	褐褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	礫を多く含む。しまり無い。	9	ふく・黄褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。
4	褐褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	小礫を非常に多く含む。しまり無い。	10	褐褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山ブロックを微量含む。
5	褐褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	小礫を微量含む。しまり無い。	11	明赤褐色 (5YR5/6)	シルト	燒土
6	ふく・黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山ブロックを含む。	12	ふく・黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	小礫を非常に多く含む。しまり無い。

第6図 SX2 焼成遺構



第7図 SX2 焼成遺構出土遺物

## (5) 土坑

おおむね長軸 0.5 m 以上のもので、円形もしくは梢円形のものを土坑とした。計 28 基検出した（表 1）。このうち 1 基について半裁し精査を行った。

### 【SK16 土坑】（第 3・8 図）

調査区西部で検出した。他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕 平面形は梢円形を呈する。長軸 1.0 m、短軸 0.8 m、深さ 0.35 m の規模である。

〔堆積土〕 大別 3 層を確認した。地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色または黒褐色シルトの人为堆積土である。底面で一部焼面が認められた。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

## (6) 溝跡

3 条検出した（表 2）。このうち 1 条について精査を行った。

### 【SD36 溝跡】（第 3・8・9 図）

調査区北西部で検出した東西方向の溝跡である。北側の上端が調査区外にあり、南側上端も攪乱で確認できておらず幅の詳細は不明である。他の遺構との重複はない。

〔規模〕 確認長約 14.3 m、上幅 2.6 m 以上、下幅 1.1 m 以上、深さ約 1.4 m である。

〔堆積土〕 大別 4 層を確認した。いずれも小礫を多く含むにぶい黄褐色の粘土質シルトで、自然堆積土である。

〔出土遺物〕 2 層から中世陶器の破片が出土している。

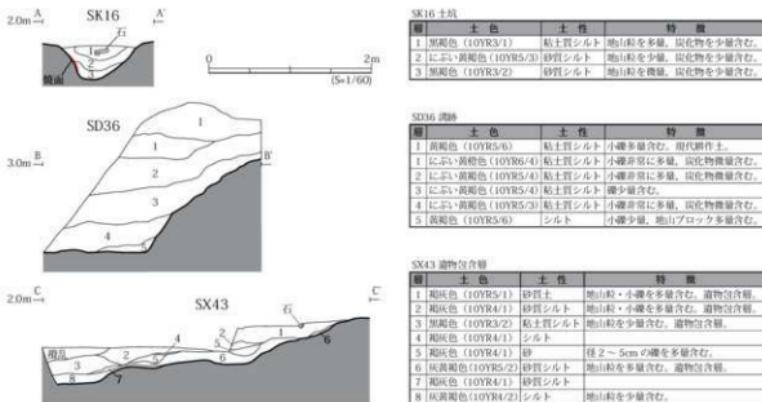
## (7) ピット

長軸 0.5 m 以下の小穴をピットとした。計 147 個検出した。段下げ等の精査は行っていない。一部を半裁し、柱掘方や柱痕跡を確認したことから、大半は柱穴と考えられる。重複関係から古代以降のものとみられるが、正確な年代は不明である。遺物は出土していない。

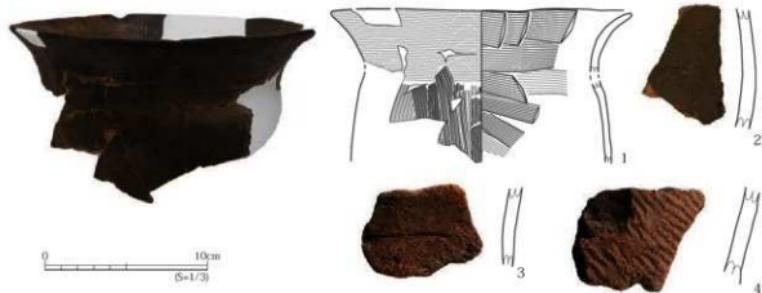
## (8) 遺物包含層

### 【SX43 遺物包含層】（第 3・8・9 図）

調査区中央南側で、部分的に遺物を含む層を確認したため、遺物包含層とした。SI1 竪穴建物跡・SK27 土坑・SX41 性格不明遺構・ピットと重複しており、SX41 より新しく、SI1 竪穴建物跡・SK27 土坑・ピットよりも古い。2・3・4・7 層から縄文土器の小破片が少量出土した。器形等が分かる物はない。



第8図 SK16土坑・SD36溝跡・SX43遺物包含層断面図

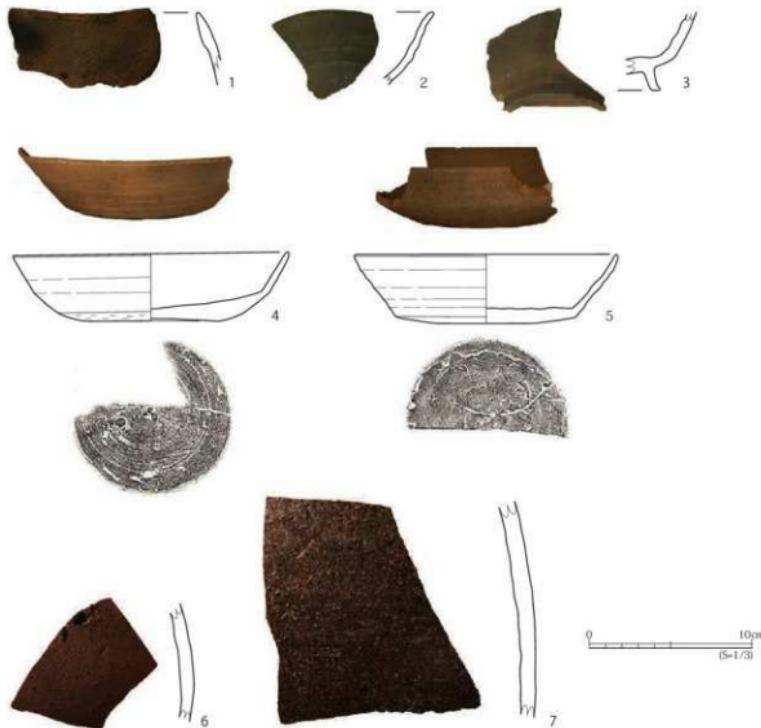


No.	出土位置	種別	品種	現存	特徴	登録
1	SK34/壁面	土器部	甕	1/4	口縁部～体部残存、外曲口縁～斜面部ヨコナギ、体部ハケメ、内面ハケメ	30-1
2	SD36/2層	中世陶器	甕	破片	体部破片、常滑	32-1
3	SX43	縄文土器	深鉢	破片	体部破片、外曲に横位拉削とLR鉈文	10-1
4	SX43	縄文土器	深鉢	破片	体部破片、外曲に粗鉈文	10-2

第9図 SK34土坑・SD36溝跡・SX43遺物包含層出土遺物

### (9) 遺構外出土遺物

遺構確認面等から、縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器の破片が若干出土している。このうち、須恵器は器形・大きさが把握できる資料が2点あり、底部に回転ヘラ削りが施されているものと、回転ヘラ切り無調整のものがある。中世陶器は壺の体部破片とみられ、胎土等の観察から常滑産と考えられる。



No.	出土位置	種別	器種	残存	特徴	目録
1	遺構確認面	縄文土器	縦	破片	口縁部破片、外面にLR縄文	3-2
2	遺構確認面	須恵器	縦	破片	口縁部～体部破片 外：ロクロナデ	3-1
3	遺構確認面	須恵器	縦	破片	外：ロクロナデ（底）切り離し不明→回転ヘラ削り→両台脚付け→ロクロナデ 内：ロクロナデ	3-3
4	遺構確認面	須恵器	縦	1/3	外：ロクロナデ（底）回転ヘラ切り→回転ヘラ削り 内：ロクロナデ	31-2
5	遺構確認面	須恵器	縦	1/2	外：ロクロナデ（底）自然へら切り	31-1
6	遺構確認面	中世陶器	縦	破片	体部破片 外：ナデ・自然縫 内：オサニ・ナデ 常滑	4-1
7	遺構確認面	中世陶器	縦	破片	体部破片 外：自然縫・押田（糠状） 内：ナデ 常滑	4-2

第10図 遺構外出土遺物

表 1 土坑一覧

No.	平面形	周縁 (m)	確認面堆積土	備考
SK8	不整円形	(0.22)	10YR3/1 黒褐色シルト、地山小ブロックを少量	SD37 より古
SK9	不整円形	1.10 × 0.78	10YR3/1 黒褐色シルト、地山小ブロックを少量	
SK10	不整円形	0.83 × 0.63	10YR3/1 黒褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	SK12 より古
SK11	楕円形	0.81 × 0.66	10YR3/1 黒褐色シルト、地山小ブロックを少額	
SK12	不整形	1.04 × 0.84	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを少額	SK10・SK13 より新
SK13	不整円形	(1.04) × 0.83	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを少額	SK12 より古
SK14	円形	0.58 × 0.55	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	
SK15	円形	0.66 × 0.66	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	
SK16	楕円形	0.96 × 0.76	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	
SK17	円形	0.81 × 0.77	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを少額	
SK18	円形	0.62 × 0.55	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	
SK19	楕円形	0.68 × 0.57	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	
SK20	不整円形	0.46 × 0.37	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK21 より新
SK21	楕円形	0.68 × 0.54	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK22 より古、SK20 より新
SK22	楕円形	(0.64) × 0.45	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK21 より古
SK23	不整円形	0.50 × (0.30)	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK24 より古
SK24	楕円形	0.60 × 0.49	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK23
SK25	楕円形	0.63 × 0.47	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	
SK26	楕円形	0.52 × 0.40	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	
SK27	不整円形	0.80 × (0.49)	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	SK43 より新
SK28	不整形	0.58 × 0.45	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK43 より新
SK29	円形	0.60 × 0.58	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	
SK30	不整円形	0.52 × 0.35	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを非常に多量	SK31 より新
SK31	不整円形	0.52 × 0.42	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	SK30 より古
SK32	楕円形	0.79 × 0.59	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを多量	
SK33	不整円形	0.51 × 0.42	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを少額	
SK34	不整形	1.18 × 0.90	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを少額	SK35 より古、SK2 より新
SK35	楕円形	0.68 × 0.42	10YR3/1 黑褐色シルト、地山小ブロックを少額	SK2・SK34 より新

表 2 溝跡一覧

No.	長さ (m)	上幅 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
SD36	(14.3)	(2.6)	(1.4)	中世陶器(青磁)	
SD37	(2.86)	0.36 ~ 0.40			SK8 より新
SD38	(1.03)	0.11 ~ 0.17			

※「( )」内の数字は確認長

表 3 遺構番号対照表

開拓番号	跡跡番号	種別	開拓番号	跡跡番号	種別	開拓番号	跡跡番号	種別
S11	S11	堅穴遺物	SK16	SK9	土坑	SK31	SK24	土坑
SK2	SK1	積成遺構	SK17	SK10	土坑	SK32	SK25	土坑
SB3	SB1	楕円柱建物	SK18	SK11	土坑	SK33	SK26	土坑
SB4	SB2	楕円柱建物	SK19	SK12	土坑	SK34	SK27	土坑
SA5	SA1	柱穴	SK20	SK13	土坑	SK35	SK28	土坑
SA6	SA2	柱穴	SK21	SK14	土坑	SD36	S11	溝
SA7	SA3	柱穴	SK22	SK15	土坑	SD37	S12	溝
SK8	SK1	土坑	SK23	SK16	土坑	SD38	S13	溝
SK9	SK2	土坑	SK24	SK17	土坑	SX39	SX2	不明
SK10	SK3	土坑	SK25	SK18	土坑	SX40	SX3	不明
SK11	SK4	土坑	SK26	SK19	土坑	SX41	SX4	不明
SK12	SK5	土坑	SK27	SK20	土坑	SX42	SX5	不明
SK13	SK6	土坑	SK28	SK21	土坑	SX43	SX6	遺物付合層
SK14	SK7	土坑	SK29	SK22	土坑			
SK15	SK8	土坑	SK30	SK23	土坑			

## 第4章 総 括

第4次調査で検出した遺構は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、柱穴列3条、焼成遺構1基、土坑28基、溝跡3条、ピット147個、遺物包含層である。遺物は縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器が出土した。遺構については部分的な調査のため、詳細な年代については確定できていない。

縄文時代の遺構としてSX43遺物包含層がある。層中からは縄文土器の小破片が少量出土している。北側で行われた第3次調査では縄文時代早期後葉～前期前葉頃の焼土遺構や土坑と、縄文土器・石器が出土しており（南三陸町教育委員会2018）、今回検出した遺物包含層もあわせて、丘陵上部の西側等における居住を窺わせる内容となっている。

古代の遺構としてはSI1竪穴建物跡、SX2焼成遺構がある。SI1竪穴建物跡は1回の建て替えが認められ、西側を一部扯張している。カマド部分から出土した非口クロ成形の土師器甕などから、建物跡の年代は8世紀頃と考えられる。また、今回の調査区内からは、遺構に伴う遺物ではないものの、器形や大きさが把握できる須恵器杯が2点出土している。うち1点（第10図4）は、体下部から底部にかけて回転ヘラケズリによる再調整が施されており、桃生城跡SB17西脇殿跡出土土器に類似していることから（宮城県多賀城跡調査研究所1995）、年代としては8世紀第3四半期の資料とみられる。他の1点（第10図5）についても8世紀後半頃の土器と考えられる。一方、丘陵斜面上部で実施された第3次調査では、9世紀代の竪穴建物跡3棟などが発見されており（南三陸町教育委員会2018）、おたまや遺跡では8世紀から9世紀にかけて、丘陵上だけではなく低地に近い部分も居住域として集落が営まれていたことが明らかとなった。SX2焼成遺構も、出土した遺物にはロクロ土師器が含まれないことから、8世紀頃の遺構と考えられ、整地された上に確認された炭化物層や焼土の存在から、何らかの工房や製塩等に関わる施設であったと考えられる。

古代以降の遺構としては、SB3・SB4掘立柱建物跡、SA5～7柱穴列、土坑・溝跡・ピット等があげられる。掘立柱建物跡・柱穴列・ピット群は、埋土から同じ時代の遺構群とみられ、重複関係からSI1竪穴建物跡よりも新しいものと判断される。このほかSD36溝跡から1点、遺構外から2点の中世陶器片が出土しており、おたまや遺跡自体は古代の遺跡として登録されているものの、すぐ西側に位置する中世城館・旭館跡と関連するような中世の遺構が、今回の調査区周辺に存在する事も想定される。SD36溝跡については、丘陵裾部に沿うように延びており、幅も2m以上であることから、旭館の前面に位置するおたまや遺跡の小丘陵を囲う、堀状の施設であった可能性も推測される。

#### 引用・参考文献

- 佐藤正助 1985 『志津川物語』 NSK 地方出版社
- 佐藤敏幸 2007 「第Ⅱ章 東北・北海道における 6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係 vi. 宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
- 志津川中央公民館 1993 『志津川の屋号』
- 志津川町 1991 『歴史の標 一志津川町誌Ⅲ-1』
- 志津川町教育委員会・志津川町文化財保護委員会 1983 『旭ヶ浦の記』
- 田中則和 2016 「南三陸町朝日館跡の現況と評価」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第 48 号
- 田中則和 2018 『南三陸の山城と石塔』（河北選書）河北新報出版センター
- 南三陸町教育委員会 2016a 『新井田館跡』（南三陸町文化財調査報告書第 1 集）
- 南三陸町教育委員会 2016b 『南三陸町東日本大震災復興事業関連遺跡発掘調査報告Ⅰ』（南三陸町文化財調査報告書第 2 集）
- 南三陸町教育委員会 2017 『南三陸町東日本大震災復興事業関連道路発掘調査報告Ⅱ』（南三陸町文化財調査報告書第 3 集）
- 南三陸町教育委員会 2018 『南三陸町東日本大震災復興事業関連道路発掘調査報告Ⅲ』（南三陸町文化財調査報告書第 4 集）
- 宮城県教育委員会 2017 『東日本大震災による被災文化財等の復旧・復興の記録（中間報告）』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1995 『桃生城跡Ⅲ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 20 冊）
- 村上裕次 2017 『新井田館跡』『季刊考古学』第 139 号（特集：戦国城郭の考古学）

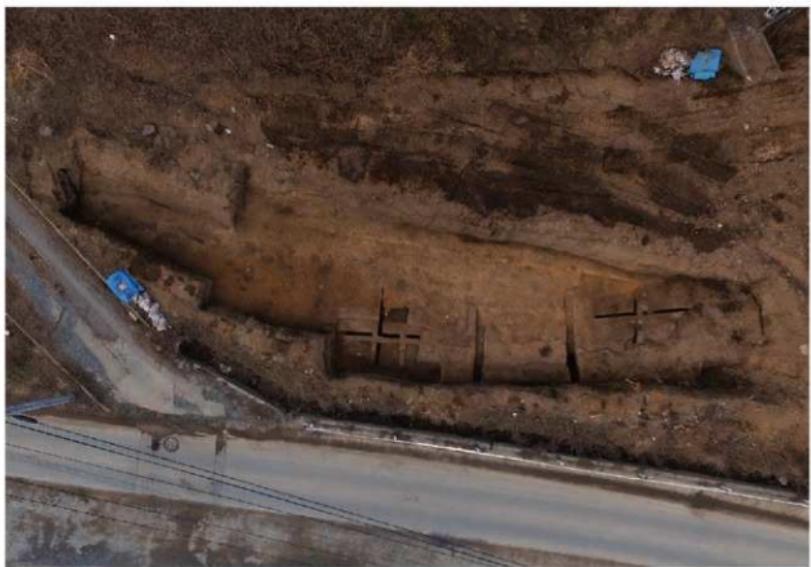


1. 調査区遠景（西から）



2. 調査区遠景（東から）

#### 写真図版 1 調査区遠景



1. 調査区全景（上から）



2. 調査区全景（東から）

## 写真図版2 調査区全景



1. SI1 竪穴建物跡・検出状況（上から）



2. SI1 竪穴建物跡・検出状況（南東から）



3. SI1 竪穴建物跡 A カマド（南西から）



4. SI1 竪穴建物跡 B カマド（南から）



5. SI1 竪穴建物跡・南北断面北側（南東から）

写真図版 3 SI1 竪穴建物跡



1. SI1 竪穴建物跡・南北断面南側（東から）



2. SI1 竪穴建物跡・東西断面西側（北東から）



3. SX2 烧成遺構検出状況（上から）



4. SX2 烧成遺構・炭化物層一部掘り下げ状況（上から）



5. SX2 烧成遺構・東西断面西側（北西から）



6. SX2 烧成遺構・東西断面東側（北東から）



7. SX2 烧成遺構・南北断面北側（北西から）



8. SX2 烧成遺構・南北断面南側（北西から）

写真図版 4 SI1 竪穴建物跡・SX2 烧成遺構



1. SK16 土坑・断面（西から）



2. SK34 土坑・確認面遺物出土状況（南から）



3. SD36 溝跡・断面（東から）



4. SX43 遺物包含層・断面（北東から）



5. 調査区西側のピット群（南から）



6. 作業風景



7. 調査後の山砂による遺構面保護状況（西から）



8. 工事施工後の現況（令和2年2月）

写真図版5 SK16 土坑・SK34 土坑・SD36 溝跡・SX43 遺物包含層ほか

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	げんこういせきほか							
書名	源光遺跡ほか							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第256集							
編著者名	黒田智章・矢内雅之							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町 3-8-1 TEL: 022-211-3685 FAX: 022-211-3693							
発行年月日	西暦 2021年 3月 19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因		
北緯	東經	市町村	遺跡番号					
げんこういせきほか 源光遺跡	くりはら市源光館伊豆 わづのまちひや つねだとうちまさ 源光館源光、塩釜館内沢	042137	41068	38度 43分 50秒	141度 1分 49秒	2019.06.05 ～ 2019.06.24	1,039ml	道路改良
ひがしまさだらいせきほか 東島田原遺跡 かみあしじのいせきほか 上足沢遺跡	刈田郡七ヶ宿町字 わがしまさだら 東島田原、 しもあしじのいせきほか 下島田原、東谷地山	043028	04069 04071	37度 59分 20秒	140度 26分 49秒	2019.11.18 ～ 2019.11.29	550ml	農地中間管理 機構間連農地 整備事業
おたまや遺跡	おとまやくじんみねみねさきりゅう 吉古郡南三陸町 しづかわむかわら 志津川竹川原	046060	60058	38度 40分 32秒	141度 26分 13秒	2016.01.18 2016.02.15 ～ 2016.03.07	240ml	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
源光遺跡	集落跡	縄文 古代 中世	竪穴遺構・溝跡・ 柱穴・ピット	縄文土器	竪穴遺構は中世か。			
東島田原遺跡 上足沢遺跡	散布地	縄文	柱穴・ピット	縄文土器 石器	柱穴・ピットは近現代か。			
おたまや遺跡	散布地・集落跡	縄文 古代	竪穴建物跡・焼成遺構・掘立柱 建物跡・溝跡・ 土坑・ピット	縄文土器 土師器 須恵器 中世陶器	建て替えを伴う 8世紀代 の竪穴建物跡 1棟を検出。			
要 約								
源光遺跡	都市計画道路源光町田線改良工事に伴う調査の結果、竪穴遺構 1基、溝跡 3条などを検出した。竪穴遺構は周辺で過去に確認された竪穴遺構と規模・形状・堆積土の特徴等が類似し、これらと同様中世に属する可能性がある。							
東島田原遺跡 上足沢遺跡	農地中間管理機構による農地整備事業に先立ち、両遺跡近く接地において確認調査を実施した。調査の結果、近代以降の柱穴や周辺からの混入とみられる石器・縄文土器が少量出土したが、両遺跡の範囲は事業計画地まで拡大しないことが確認された。							
おたまや遺跡	東日本大震災からの県道志津川登米線の復旧工事に伴い発掘調査を実施した結果、8世紀代の竪穴建物跡 1棟と焼成遺構 1基のほか、縄文時代の遺物包含層 1箇所、古代以降とみられる掘立柱建物跡 2棟・柱穴跡 3条・土坑 23基・溝跡 3条などを検出した。竪穴建物跡は一度拡張を伴う建て替えが行われている。調査区内からは 8世紀後半の須恵器灰も出土しており、第 3次調査で検出されている 9世紀代の竪穴建物跡 3棟とあわせて、8～9世紀代にかけて小規模な集落が営まれていた様子が明らかとなった。							

---

宮城県文化財調査報告書第 256 集

源光遺跡 ほか

令和3年3月12日印刷

令和3年3月19日発行

発行 宮城県教育委員会

仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24番24号

TEL 022（263）1166㈹

---